

名城大学教育年報

第15号

令和3年3月

名城大学

大学教育開発センター委員会

名城大学教育年報（第15号） 目次

◇教育功労賞受賞者による特別寄稿

学部ベースでの海外プログラムの教育実践と教育効果…………… 1

津村 文彦 西尾 由里 菱田 圭祐

◇教育実践報告

学業成績不振学生を対象とした教育と実践（第11報）

— ICTを活用し基礎知識の補強を目指した学習支援プログラムの開発と教育実践— …… 11

飯田 耕太郎

健康教養を身につけ健康づくり活動を実践・支援できる人材の育成…………… 19

梅田 孝 金子 美由紀 小泉 和也 水野 智博

Challenges and Possibilities of Online English Education …… 23

Yuri Nishio Gregory Minehane Hideo Yanagisawa Paul Wicking

Max Prayer Arata Miyazaki James Rogers

2020年度前期新型コロナウイルス感染症禍における体育実技科目の実践例 …… 31

富岡 徹

大学生へのアンケートからみえる英語教育の課題…………… 39

山口 佐和子

真に豊かな人生と社会のために II 法学部「倫理学」の遠隔授業を中心にして …… 49

星 揚一郎

◇資料

令和2年度名城大学教育年報（教育実践報告）募集要項…………… 59

令和2年度「名城大学教育年報」投稿要項…………… 61

◇あとがき…………… 63

大学教育開発センター長 山田 宗男

**教育功労賞受賞者による
特別寄稿**

学部ベースでの海外プログラムの教育実践と教育効果

津村 文彦¹⁾ 西尾 由里²⁾

名城大学外国語学部国際英語学科

菱田 圭祐³⁾

名城大学国際化推進センター

1. はじめに

本稿は名城大学外国語学部が、学部ベースで行う海外プログラムを、教育実践を交えて報告し、その教育効果について検討するものである。

世界の海外留学生数は、1975年に80万人ほどであったが、2015年には460万人に増加した。特にアジア太平洋とヨーロッパ地域において、学生の国際流動が活発・多様化した [太田 2018 : 2]。日本では、2010年頃より産業界からの要請に基づいて、政府が海外留学促進に関する政策を展開してきた。留学生交流支援制度 (2009年)、大学の世界展開力強化事業 (2011年)、グローバル人材育成事業 (2012年)、官民協働海外留学支援制度～トビタテ! 留学 JAPAN 日本代表プログラム～ (2014年) 等を通じて、グローバル人材の育成強化が図られてきた [芹沢 2013 : 21、太田 2018 : 2]。

OECD、ユネスコ、米国国際教育研究所の統計による日本からの海外留学生数は、2017年に58,000人程度で、2004年の83,000人をピークに減少傾向にある。ただしこの数字は、留学期間が1年未満の学生や交換留学プログラムを含まないため、実際の留学生数より低い傾向がある [文部科学省 2020]。一方、日本学生支援機構の「協定等に基づく日本人

学生留学状況調査」によると、日本人留学生数は2003年の15,000人から毎年増加し、2018年には115,000人が留学プログラムに参加している [日本学生支援機構 2020]。国別留学先は、アメリカ合衆国、オーストラリア、カナダ、韓国、中国、イギリス、台湾、タイ、フィリピン、ドイツ等で、欧米諸国と中国語圏がほとんどである。また専攻分野は、人文科学が51.5%、社会科学が10.1%と、いわゆる文科系分野を専攻する学生が大半を占めている。

こうした国内外の状況のなか、名城大学外国語学部では2016年の開設以来、様々な海外プログラムを進めてきた。2015年以前も、名城大学では、国際化推進センターを主体とした学部ベースでの海外英語留学および交換留学や、学部ベースでの短期海外研修プログラムが行われていたが、外国語学部では、学部ベースで、より大規模に多様な留学プログラムを推進させてきた。以下では、プログラムのデザインと概略 (第2章) を紹介したのち、「 Semester 留学」と「国際フィールドワーク」の事例 (第3、4章) と、海外プログラムの教育効果 (第5章) を分析し、最後に今後の課題 (第6章) について検討する。

1) 第1章、第4章、第6章担当

2) 第5章担当。なお西尾は2019年度教育功労賞の対象ではないが、効果分析に不可欠なため執筆に加わった。

3) 第2章、第3章、第6章担当。

2. 外国語学部の海外プログラムの設計

2-1. 外国語学部の設立背景と思想

外国語学部は、グローバル化が深化する世界において求められる実践的なコミュニケーション力を有し、国境を越えて活躍できる、「世界人材」の育成を目的として設立された。

外国語学部ウェブサイトによると「世界人材」とは、①グローバル化社会の最前線で活躍できる英語の運用能力を有し、②アジアをはじめとする海外の事情に通じ、異文化や国際社会に対して深い理解力を持ち、③日本の歴史、文化、社会を深く理解し、日本の立場や事情を世界に発信する能力を備え、グローバル化社会を切り開くことができる人材である。

また外国語学部のディプロマ・ポリシーでは、人材養成目的に基づき、身につけるべき資質・能力として以下の3つを挙げている：①英語を実践的に運用できる、②海外の事情に通じ、深く異文化を理解できる、③対話と協働により、主体的に課題を発見し、取り組むことができる。

これらの能力を外国語学部では、英語が溢れる学習環境や留学等 Hands-On Learning (体験重視型学習) を通じ養成している。なかでも、留学・研修プログラムについては、語学を主に学ぶ留学から、英語力を活かしながら現地調査等を行うものまで、幅広いプログラムを実施している。

なお外国語学部では、海外プログラムへの参加を推奨するものの、卒業の必修条件ではない。

2-2. 各学年のプログラム概略

外国語学部が主催する海外プログラムは、学生が在学中に2回参加することをモデルとして想定し、主に語学を学ぶ第一ステップと、学んだ英語力を実践的に使用する第二ステップにより構成されている。

外国語学部の学生は、多くが海外留学を希望し、

また中長期の留学を目指す学生が多いため (表1, 2)、そうした学生の思いを実現するべく、中長期留学の実施に注力している (表3)。中長期留学の中でも、2年次に海外の大学での英語集中プログラムに参加するセメスター留学が、外国語学部主催プログラムの中心となっている。

表1：在学中の留学希望について (対象：在學生)

学部	回答者数 (人)	是非行きたい	機会があれば行ってみたい	行ってみたいと思わない	行ってみたい計
外国語学部	413	78.5	13.8	2.9	92.3
経営学部	1160	20.3	49.1	26.8	69.4
理工学部	4336	12.2	45.8	39.8	58.0
人間学部	757	28.7	40.4	28.3	69.1

出所：[名城大学学務センター 2020] より菱田作成

表2：希望する留学期間 (対象：新入生)

学部	回答者数 (人)	1~2週間	1ヶ月	2~3ヶ月	半年間	1年間	1年超
外国語学部	110	3.6	9.1	30.9	33.6	18.2	3.6
経営学部	205	22.4	33.2	13.2	15.1	13.2	2.0
理工学部	617	21.9	34.2	20.4	12.3	9.1	0.6
人間学部	156	25.6	28.8	21.2	14.1	8.3	0.6

出所：[名城大学学務センター 2020] より菱田作成

表3：外国語学部主催海外プログラム

	プログラム	内容	期間	1年	2年	3年	4年
1	セメスター留学	英語集中プログラム参加	3~5ヶ月程度	—	○	—	—
2	海外研修	英語集中プログラム参加	1ヶ月程度	—	○	○	○
3	長期留学	正課科目受講	10ヶ月程度	—	○	○	○
4	パレンシア国際カレッジプログラム	講義受講および業務体験	5ヶ月程度	—	○	○	○
5	国際フィールドワーク	調査等	2週間程度	—	—	○	○
6	海外インターンシップ	業務体験	4週間程度	—	—	○	○

出所：筆者作成

【1年次】

外国語学部の1年次においては、ALL ENGLISHで実施する英語スキル科目を毎日受講し、スピーキング、リスニング、ライティング、リーディングの4技能を総合的に高める。

さらに、キャンパス内のグローバルプラザを〈国内留学〉の場として活用し、英語を〈使う〉経験を重ね、英語力に磨きをかけている。海外プログラム

に参加しないという選択をする学生にも、グローバルプラザにおける学びは貴重な機会となっている。

【2年次】

2年次以降においては、主に英語力を集中的に高めることを目的として、 Semester 留学、海外研修を実施している。さらに、すでに相当の英語力を有する学生には、英語圏の大学で正課科目の受講や業務体験を行うプログラムとして、長期留学やバレンシア国際カレッジプログラムを実施している。

(a) Semester 留学

2年次前期または後期に、アメリカ・カナダ・オーストラリアの3カ国12大学（表4）において、3ヶ月～5ヶ月間の英語集中プログラムに参加するものが Semester 留学である。

毎年約7割の2年次学生が Semester 留学に参加する（表5）。学生は自分の希望する時期と大学を選択し、特定大学に留学希望者が集中した場合には、GPAやTOEICスコア等で優先順位をつけ、大学ご

との参加者を決定している。

留学中は、それぞれの大学において英語集中プログラムに参加し、レベル分けされたクラスで他国の留学生とともに学習する。現地での学習と生活を通して英語力を向上させるとともに、豊かな国際感覚や問題解決能力を養うことを目指す。留学中の学びについては、外国語学部カリキュラム内の英語科目として、最大15単位まで単位認定を行っている。

(b) 海外研修

海外研修は、前期に講義を受講し、8～9月の約1ヶ月間、協定校であるディクシー州立大学の英語集中プログラムに参加する研修プログラムである。

経済的理由等から、 Semester 留学に参加しない学生にとって代替プログラムとしての機能も果たしている。参加者数は表6のとおり推移している。

(c) 長期留学

長期留学は3カ国4大学において、約10ヶ月正課科目を受講する留学プログラムである（表4）。参加においては、一定の成績・語学要件が求められる。特に語学要件は、現地正課科目を受講できる高いレベルが求められるため、継続的に参加者を増やすためには国内での英語学習を一層促進する必要がある。

現地で受講した科目のうち、学部のカリキュラムに相当する科目について単位認定をしている。参加者数は表6のとおり推移している。

(d) バレンシア国際カレッジプログラム

約5ヶ月間アメリカのフロリダ州で、バレンシアカレッジ講師によるビジネス・ホスピタリティに関する講義を受講しながら、ディズニーワールドで業務体験をするプログラムである。

英語試験やディズニー担当者による面接等の選考を経た上で参加者が決定される。ディズニーワールドでは世界各国からの来園者に対応する必要があり、高い英語力とコミュニケーションレベルが求められる。プログラム開始依頼、選考を通過した学生

表4： Semester 留学・長期留学 留学先大学

国	大学	前期 Semester 留学	後期 Semester 留学	長期留学
アメリカ	ワーナーパシフィック大学	○	○	/
	ソノマ州立大学	/	○	
	ディクシー州立大学		○	
	マレー州立大学		○	
	ノースフロリダ大学		○	
カナダ	カルガリー大学		○	○
	レスブリッジ大学	○	○	
	ウィニペグ大学	○	○	
	ブロック大学	○	○	
オーストラリア	クイーンズランド工科大学	○	○	/
	ニューカッスル大学	○	○	
	ディーキン大学	○	○	

出所：菱田作成

表5：入学年度別 Semester 留学 参加者数一覧

	前期	後期	合計	入学者数
2016年度入学生	40	70	110	138
2017年度入学生	57	52	109	148
2018年度入学生	23	76	99	133
2019年度入学生※	25	54	79	125

※新型コロナウィルスの影響により、実施見合わせ中
出所：菱田作成

がまだいないため、長期留学同様、国内での英語学習を一層促進するとともに、授業でのグループワークやアクティブラーニングを通じて、対人コミュニケーション力の底上げを図る必要がある。

【3年次】

2年次までに培った英語力を活かしながら、社会で活かせる、より実践的な能力を育成するため、主にアジア諸国で調査や業務体験を行う「国際フィールドワーク」「海外インターンシップ」を実施している。参加者数は、表6のとおり推移している。

(e) 国際フィールドワーク

国内での事前学習ののちに、シンガポールやタイで、現地文化等も学びながらフィールド調査を行う。事前学習で知識を得たのちに、現地で活動することで、表層的な理解に留まらず、より深いレベルで対象社会への理解を深めることができる。

(f) 海外インターンシップ

海外企業で業務体験を行うプログラムで、2018・2019年度はマレーシア・クアラルンプールのホテル等で業務体験を行った。業務内容はゲスト対応等の対人サービスを初め多岐にわたる。参加学生は、英語を用いて働くことの困難に加え、働くことに対する考え方の違いや異文化でチームとして働くことの困難を体感し、世界人材として学びを深める。

業務開始時には、多くの学生が新しい環境に戸惑い悩みながらも、自分の役割を徐々に見つけ、積極的に行動することの大切さに改めて気付いていく。

海外の企業で、インターンシッププログラムを行う場合、参加学生は事前に現地の社会文化や商習慣を知っておくことが不可欠である。また研修先企業にとって、参加学生はゲストではなく、あくまで業務経験を積むことを希望する研修者であり、企業側のルールに基づいた適切な行動が求められること等を、学生に十分に理解させた上で進めることが、プログラムのスムーズな実施と参加学生の満足度を上げるためにきわめて重要である。

表6：海外プログラム参加者数一覧

	2017年度	2018年度	2019年度
海外研修	5	1	5
長期留学	0	1	1
国際フィールドワーク (シンガポール)	/	/	13
国際フィールドワーク (タイ)			17
海外インターンシップ (マレーシア)			2

出所：菱田作成

【4年次】

外国語学部では、多くの学生が一般企業での就職を目指して就職活動を行う。就職活動での企業担当者へのアピールとして、海外プログラムに参加したというだけではすでに付加価値をもたない。そこで参加学生には、プログラムの経験を通じて、何を学んだのかを、言語化することの重要性を、オリエンテーションや留学後の報告会等で、繰り返し伝えながら言語化の機会を創出している。

2-3. プログラム支援体制と年次スケジュール

外国語学部では、現在、恒常的に実施する海外プログラムとして、複数プログラム(表3)を主催・実施している。表3以外にも、1年次から参加できるプログラムを随時実施している。学部主催のプログラムについては、担当職員と学部内国際交流委員会が連携して、検討・準備・実施を行っている。

海外プログラムの実施にあたり、最重要項目として、「安心・安全」であることを掲げており、出発前のオリエンテーション等を通じ、参加学生へ情報共有や注意喚起をしている。

しかしながら、どれだけ事前準備を行っても、プログラム実施中、特に中長期プログラムにおいて、なんらかのトラブルが一定程度発生する。外国語学部では、危機発生時に可能な限り速やかな対応が取れるよう、担当職員と学部内の危機管理委員会を中心とする対応体制を整えている。ほぼ1年中、何らかの海外プログラムに学生が参加しているため(表7)、常に危機に備えた心構えと体制が、担当教

職員に求められている。

表7：外国語学部主催プログラム年間スケジュール

NO	プログラム	実施時期
1	Semester留学	前期 (3月～8月) 後期 (8月～12月。一部2月まで)
2	長期留学	米・加 8・9月～翌年4月・5月 豪 2月～11月
3	国際フィールドワーク	8・9月／2・3月
4	海外インターンシップ	8・9月／2・3月
5	パレンシア国際カレッジプログラム	8月～翌年1月／2月～8月
6	海外研修	8・9月

出所：菱田作成

3. セメスター留学の実践報告

次に海外プログラムのうち、最も参加学生の多い Semester留学について、実施事例を紹介する。

【事例】ワーナーパシフィック大学

ワーナーパシフィック大学は、アメリカ・ポートランドにある1937年に創立された学生数1,600名程度の小規模私立大学である。外国語学部では、2018年後期より、ワーナーパシフィック大学において Semester留学を実施している。3期（2018年度後期（2名）、2019年度前期（3名）・後期（7名））を通して12名の学生が参加をした。

ワーナーパシフィック大学の Semester留学プログラムでは、10週間の英語集中プログラムに参加したのち、約6週間現地NPO等において、業務体験を行うサービスマーケティング（以下SL）に参加する。

英語集中プログラム参加中に、興味のある活動・団体を探し始め、履歴書の作成を含むSLの事前準備コースの受講後、当該団体に自ら申請して活動許可を得る。これまで外国語学部の学生は、女性の社会進出をサポートするNPO、小学校、ホステル等におけるSLに参加してきた。

SLにおいて、現地の人々と共に働く経験を通じ、異文化環境で働くことの楽しさと難しさを学ぶと共に、留学生という訪問者の視点だけではなく、現地コミュニティにおける生活者の視点から、現地社会を眺めることができるようになる。

SLの研修先では、留学生向けにスピードや表現を制限した英語集中プログラムとは全く異なったネイティブスピーカーの容赦のない英語環境に身を置くため、より高度な英語力の必要性を学生は痛感することとなる。さらに、SL中は、受け身で待っていても仕事は与えられないため、積極的に自ら動いて、自分ができる仕事を見つけ出し、自身の役割を見つける必要がある。この経験を通じて、参加学生は、自ら動くこと、行動することの大切さを学ぶ。

以下に参加学生の感想を紹介する。

【参加学生の感想】(抜粋要約)

- ・英語を使いながら、各種業務を正確にこなすこととの責任と難しさを痛感した。
- ・職場での打ち合わせ等を通じて、自分の意見を持ち、伝えることの大切さを学んだ。
- ・WEBSITEのアップデートを担当。英語に加えて、専門的な力を身につけることの必要性を感じた。

4. 国際フィールドワークの実践報告

もう一つの事例を紹介しよう。2年次までに習得した英語能力をツールとして活かしながら、世界の現場で実践的コミュニケーションを養成し、国際理解を深める目的で、3年次以降に実施される研修プログラムのうち、「国際フィールドワークⅡ（非英語圏）」について2018年度の実践事例を紹介する。

【事例】

2018年度は3年生の17名が参加した。前期に8コマの事前学習を行ったのち、夏休み期間の研修を挟んで、後期に7コマの事後学習を実施した。17名を3～4人ずつの5グループに分けて、授業内での活動は基本的には同グループで行った。

5月から7月にかけての事前学習では、①タイの文化と社会についての文献報告、②タイでの調査・発表の準備、③動画撮影・編集の準備、④タイ語の学習を行った。タイでは、(a)日本とタイの文化

比較、(b) 東北タイの観光プロモーション動画の作成という二つの英語プレゼンテーションを予定した。

海外研修は8月26日から9月8日の2週間にわたって行った。学部から2名の教員が引率した。主たる研修先はタイ王国・コンケン大学で、プログラムはコンケン大学人文社会学部 (HUSO) の教員と津村が相談しながらデザインしたものである。

前半は、午前コンケン大学でのタイ語学習、午後プレゼンテーション (a) の準備を行った。タイ語学習は、HUSO教員が英語を使って教授し、タイ人学生へのインタビューを含む課題が与えられた。午後はHUSO学生がグループに3名ずつ入り、議論とフィールド調査を協力した。プレゼンテーション (a) では、食文化、SNS、占い等をめぐる日泰文化比較を発表した。HUSO教員・学生が80名ほど出席して、質疑応答を行った。

週末には世界遺産バンチエン遺跡のあるバンチエン村へのフィールドトリップを行った。考古学博物館の見学、朝の托鉢、村でのクラフト作り等に参加するとともにホームステイを行った。ホームステイでは、日本語も英語も通じない家庭もあったが、英語万能主義的な思考を崩し、コミュニケーションのあり方を学ぶのに大いに役立ったようであった。

後半は、プレゼンテーション (b) を行い、3分間の東北タイの観光プロモーション動画を披露し、動画の狙いを英語で説明した。引き続いて多くのHUSO教員・学生が参加し、活発な質疑が執り行われた。コンケンのあとはアユタヤに移動し、世界遺産公園を見学し、日系企業の工場見学を行った。

後期の事後学習 (7コマ) では、①研修報告書の作成、②研修の伝え方の練習を行った。②は就職面接を念頭に置いたものである。せっかく得られた貴重な経験も、ありきたりで陳腐な言葉で語ると、そこで得たものはうまく伝わらない。自らの経験と成長を、文章で綴るだけでなく、いかに魅力的に口頭

で伝えることができるかが大切で、「語ること」を実践的にトレーニングした。

このような実践を通じて、多様なコミュニケーション、異文化理解と自文化理解、国際的なプレゼンテーション能力等を養成することを目指した。

5. セメスター留学をめぐる教育効果

名城大学研究センター推進事業費の助成を受けて設立された国際共修リサーチセンター (西尾由里・二神真美・宮崎新) の報告 [2019] からセメスター留学の効果を紹介する。

留学の教育効果として、学生の英語能力の向上と異文化感受性の発達の寄与が挙げられることが多い。そこで、2017年後期、2018年前・後期に、アメリカ、カナダ、オーストラリアに留学した学部2年生129人に対して、留学前後における英語能力と異文化感受性に関するアンケート調査を行った。

英語能力に関して、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) のCanDoチェック表のディスクリプターを使用した。CEFRは、A1・A2 (基礎段階の言語使用者)、B1・B2 (自立した言語使用者)、C1・C2 (熟達した言語使用者) の6レベルに分類されている。それぞれA1～C2まで対応したサブ項目があり、「聞くこと」「読むこと」「やり取り」「話すこと」「書くこと」である。CEFRの基本項目に加え、留学では発音についても伸びがみられると考えられるため「発音」を加えて、35の質問表を作成した。質問に対する回答は、1「まったくそう思わない」から5「非常にそう思う」までの5段階評価で1つ選択させた。

例えば、A2の「話すこと」では、「直接必要のある事柄なら、簡単に短いメモやメッセージを書くことができる」、B2の「話すこと」では、「自分の興味がある分野に関して幅広い話題を明瞭かつ詳細に話したり、時事問題等短所・長所を挙げ自分の考えを話すことができる」という内容である。このよう

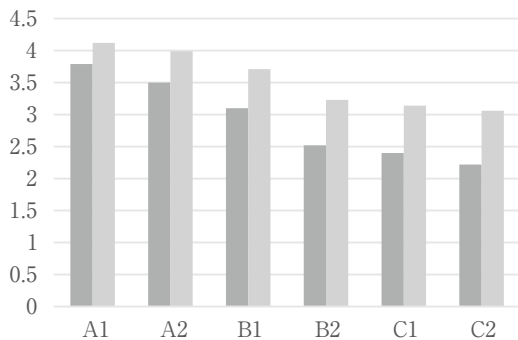
に、A1～C2とレベルが上がるにつれて、自分の身の回りの事象から、自分の専門や仕事あるいは自分の考え等を表現できる言語力を身に着けると考えられている。通常の大学生の英語レベルでは、入学時にA2レベルといわれているが、大学卒業時までの目標としてB1及びB2レベルが想定されている。

表8：CEFRのアンケート項目の留学前後の平均点

CEFR Level	留学前		留学後		t値	有意確率 (両側検定)
	M	SD	M	SD		
A1	3.79	0.59	4.16	0.54	7.045	0.00
A2	3.50	0.67	3.99	0.55	8.661	0.00
B1	3.10	0.62	3.71	0.53	11.178	0.00
B2	2.52	0.72	3.23	0.59	12.003	0.00
C1	2.39	0.64	3.14	0.61	12.894	0.00
C2	2.22	0.64	3.06	0.67	14.584	0.00

出所：[西尾他2019]

図1：CEFRのアンケート項目の留学前後の平均点



出所：[西尾他2019]

本留学生の結果を見てみると（表8，図1）、留学前では、A1・A2に関しては、3.79点、3.50点であり、B1・B2は3.10点、2.52点で、自立した言語使用者また基礎的なレベルの英語力であるという学生の認識であった。留学後は、B1・B2は、3.71点、3.23点で、C1・C2も3.14点、3.06点と非常に高い得点を示している。全項目とも統計的に有意であった。このことから、留学を通して、学生自身の英語力が自立した学習者また熟達した学習者というように、英語力が向上したという認識を持っている。

また留学に関しては、異文化の接触の度合いに応じて異文化の感受性が発達するという異文化感受性

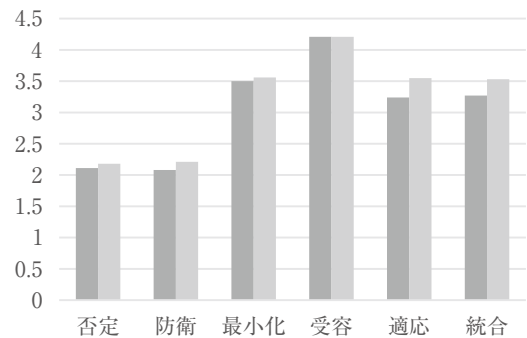
発達モデル（DMIS）を使った。このモデルでは、6段階を想定している。他の文化に対して避けるといった「否定」、他の文化が自分の文化より劣っているという「防衛」、文化は表面上の違いで、基本的には皆同じというような違いの「最小化」、違う文化があっても受け入れるべきだという「受容」、自分とは異なる文化で起こることに対して適切に行動する「適応」、自分の文化と他文化の間でどちらも属して行動できる「統合」である（表9，図2）。

表9：異文化感受性発達モデルのアンケート項目の留学前後の平均点

IDI	留学前		留学後		t値	有意確率 (両側検定)
	M	SD	M	SD		
否定	2.12	0.55	2.18	0.72	0.941	0.349
防衛	2.08	0.73	2.22	0.83	1.827	0.070
最小化	3.50	0.83	3.56	0.69	1.033	0.304
受容	4.21	0.47	4.21	0.61	0.030	0.976
適応	3.24	0.50	3.55	0.56	5.881	0.00 **
統合	3.27	0.52	3.53	0.53	5.021	0.00 **

出所：[西尾他2019]

図2：異文化感受性発達モデルのアンケート項目の留学前後の平均点



出所：[西尾他2019]

本学生は、留学前は、「否定」「防衛」に関しては、2.12点、2.08点であり、これらは得点が低いほど、そのように考えていないということであるため、異文化に対して、もともと「否定」「防衛」の否定的な認識が低いことがわかる。「最小化」「受容」は3.50点、4.21点で、「適応」「統合」も3.24点、3.27点と高得点である。この結果から、留学前から、異文化に対して、否定的感情が少なく、受容性が高いとい

える。おそらく、外国語学部の学生は、英語関連、第二言語、他の専門科目等外国語母語教員が担当している授業を履修しており、またグローバルプラザ等で、英語母語話者教員と接する機会も多いことで、異文化に対する感受性が促進していると推測される。留学後は、さらに、「適応」「統合」が、3.55点、3.53点と有意さがみられるほど上昇した。これにより、異文化感受性においても、留学の後では、さらに向上したとみられる。

したがって、西尾他(2019)の報告から、留学において、英語能力と異文化感受性に対して効果があると考えられるが、国内の他大学との同種データの比較が今後の課題として挙げられる。

6. 今後の課題

全体を通してみると、前章の分析のように、英語能力と異文化感受性について、一定の教育効果がみられるが、いずれも改善の余地はあり、引き続きプログラムの細部を精錬する必要はあるだろう。

課題として、より重大なのは、危機管理と参加学生の意識の向上である。「安心・安全な」プログラムの運営を最重要項目として準備を行なっているが、何らかの各種トラブルや危機的状況は発生する。2019年度においては、表10のようなトラブル等が発生した。いずれも学生の命に関わるような重大な案件ではないが、各種対応が求められた。

表10：2019年度実施 留学・研修実施中のトラブル例

セメスター 留学	1	現地ハリケーンにより、出発日を変更。変更後の出発日に日本に台風が接近したことにより、成田空港付近に2日間足止め。
	2	カリフォルニア州における大規模な山火事の発生。
	3	ホームステイファミリーとのトラブル。
	4	ホームステイメイト・ルームメイトとのトラブル。
国際フィー ルドワーク	5	香港におけるデモ激化に伴い、予定を変更し、途中帰国

出所：菱田作成

留学・研修実施中に発生するトラブルの傾向とし

ては、ホームステイや寮等住環境に関わるものが多い。住環境に関わる各種トラブルについては、現地で学生本人が現地関係者に交渉し、対応することが、最も早い状況改善につながるため、今後は、これまで以上に参加学生へ発生事例等の事前共有を図ると共に、学生本人が各種トラブルに可能な限り取り組むという意識の向上を図りたい。

また海外プログラムの実施にあたり、事前準備から、プログラム参加中のトラブル対応まで、多様な業務への取り組みが担当教職員には求められる。とりわけプログラム参加中の学生に関わるトラブルが発生した場合には、本人・保護者への対応、先方大学等への対応等を、限られた時間の中で迅速・適切に行う必要があり、担当教職員へ精神的・身体的に大きなストレスがかかる場合がある。

今後も、持続的に海外プログラムを運営していくためには、担当旅行業者や学内の国際化推進センター等と一層連携を深めながら、より有効な運営方法を構築していく必要があると考える。

参考文献

- 太田浩 2013「日本人学生の内向き志向再考」横田雅弘・小林明(編)『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』pp.67-93、学文社。
- 太田浩 2018「日本の海外留学促進政策の変遷」横田雅弘・太田浩・新見有紀子(編)『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト』pp.2-28、東京：学文社。
- 芦沢真五 2013「日本の学生国際交流政策」横田雅弘・小林明(編)『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』pp.13-38、学文社。
- 新見有紀子 2018「留学のインパクトに関する国内外の研究概要」横田雅弘・太田浩・新見有紀子(編)『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト』pp.29-47、東京：学文社。
- 西尾由里・二神真美・宮崎新 2019「セメスター留

学における異文化感受性発達尺度とCEFRに基づいた考察』『令和元年研究センター推進事業 国際共修リサーチセンター中間報告会資料』名城大学天白キャンパス.

日本学生支援機構 2020 「2018(平成30)年度日本人学生留学状況調査結果」, https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2019.html

名城大学学務センター 2020 「令和元年度学生アンケート結果報告書」名城大学.

文部科学省 2020 「『外国人留学生在籍状況調査』及び『日本人の海外留学者数』等について」, https://www.mext.go.jp/content/20200421-mxt_gakushi02-100001342_1.pdf

教育實踐報告

学業成績不振学生を対象とした教育と実践（第11報）

—ICTを活用し基礎知識の補強を目指した学習支援プログラムの開発と教育実践—

飯田 耕太郎

名城大学薬学部薬学科（薬学教育開発センター・教育開発部門）

1. はじめに

医療技術の高度化、医薬分業の進展とセルフメディケーションの推進等に伴い、医療における薬剤師の果たすべき役割は高まっており、その専門性を発揮して医療の質向上に貢献することが求められている。このような社会的状況を受けて2006年度より薬学部における薬剤師養成課程の年限が、4年制から6年制へと延長された。教育内容の改正ポイントとして医療薬学教育の充実と実務実習の拡充があげられ、5年次に病院及び保険薬局でそれぞれ11週間の実務実習が必修化されている。

名城大学薬学部（以後、本学部と略）では、高い専門知識と臨床技能を有し、医療の質向上に貢献する薬剤師を養成するために5年次の1年間を4つの期間に分け、病院及び保険薬局で1期間（11週間）の実務実習を必修化している。

5年次の実務実習に参加しない残りの2期間は、学内で卒業研究を進めるとともに薬剤師国家試験（以後、国家試験と略）を見据えて薬剤師の基盤となる基礎知識を習得しておくことが必要となる。本学部では、5年次の主体的な学習を促進するために実務実習が行われない期間（8月と12月）に国家試験の過去問題試験（以後、過去問題試験と略）を実施した。2012年度の過去問題試験では、平均点が8月よりも12月の方が大きく低下した。特に学業成績が良好な応用研究コース（旧、研究コース）生に比

べ成績が振るわない基本研究コース（旧、学術コース）生の平均点がより低下した。このことは、基本研究コース生がこの時期に実務実習で研修するとともに基礎知識の低下を抑えるために設けられた薬学卒業演習Ⅰ（旧、学術コース、以後、本授業と略）に積極的に参加し、基礎知識を補強することが大切であることを示している¹⁾。

しかし、2020年度、新型コロナウイルスの影響で昨年度まで実施していた対面での学生同士のペア学習授業が実施できなくなり遠隔授業に変更せざるを得なくなった。従ってスマートフォンやタブレット、パソコンを使ったオンライン授業へと変更することになった。本年度、本授業では、5年次が主体的な学習を行うことにより、基礎知識を補強するという目標を達成するために、学生と教員間でのコミュニケーションや学習状況・学習内容の共有化がスムーズに行われるように情報通信技術（ICT：Information and Communication Technologies）²⁻³⁾を活用した教育の実践を目指した。

学生の主体的な学びを実現するための取り組みには、一方的な受け身の授業でなく学生の能動的な学習への参加を目指した教育法の採用が欠かせない。主体的な学習を効率的・効果的に高めていく方法の一つとしてeラーニングがある⁴⁻⁵⁾。事前学習においてeラーニングで知識をインプットした後、テス

トで問題を解き知識をアウトプットする。知識のインプットとアウトプットの繰り返し学習を通じて不足した知識の補強と定着を促進することができる。本授業では、5年次基本研究コースの学生を対象にして基礎知識を補強するために主体的にeラーニングで学習を行い、テスト後に学習を振り返る機会を設け、学習の進捗を学生と教員間で確認するという学習支援プログラムを開発した。その教育実践について報告する。

2. 方法

2-1 教育目標

基本研究コース生がICTを活用し、知識のインプットとアウトプットの繰り返し学習を通じて不足していた基礎知識を補強することを教育目標とした。

2-2 プレテスト・ポストテストを組み合わせさせた学習支援プログラムの開発

5年次薬学卒業演習Ⅰの遠隔授業において、プレテスト・ポストテストを組み合わせさせたプログラムの概略を図1に示す。学習の流れは「プレ事前学習」⇒「プレテスト」⇒「プレ事後学習」⇒「ポスト事前学習」⇒「ポストテスト」⇒「ポスト事後学習」の6段階で構成した。事前学習では事前に予告した科目範囲の国家試験過去問題をモバイルやパソコン(以後、PCと略)を使って自己学習し、知識をインプットする。プレテストでは、事前学習した知識をアウトプットできるかを確認するためにスマートフォンやタブレットなどのモバイル端末を用いて国家試験の過去問題をSATT社のeラーニングシステムESS (Education Support System) で解答する。解答後、ESSで自動的に採点され、個人成績としてレーダーチャートで確認することができる。プレテストで不正解であった問題は、プレ事後学習として、指定した解答用ファイルに解説を記述して、ポストテスト前にレポート提出する。

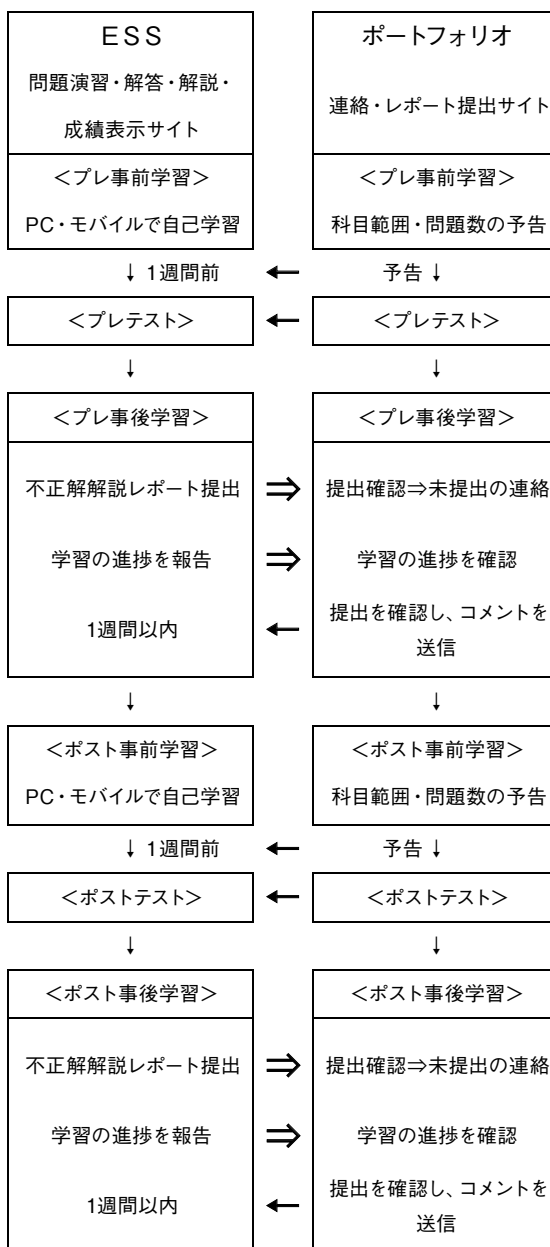


図1. プレテスト・ポストテストを組み合わせさせた学習支援プログラムの概略

学生と教員間をつなぐ共有システムとして、テストの予告や解説レポートの提出・保存など、在学中の学びに関する情報・資料を収集・整理・保存し、学生の学びの成長を可視化する履修系統図ポートフォリオ(以後、ポートフォリオと略)を利用した。1週間後、ポストテストをプレテストと同様にESSで解答する。ポストテストで不正解であった問題は、ポスト事後学習としてプレテストと同様に指定した解答用ファイルに解説を記述してプレテスト前にレ

ポートを提出する。遠隔授業の質保証として、教員と学生間のコミュニケーションが取れるように、ポートフォリオの「揭示版」に授業ごとに学習の進捗状況を書き込み、1週間以内に報告することで各授業の出席確認とした。また、学生からの疑問・質問は、ポートフォリオを経由して教員メールに届くので、積極的にコミュニケーションを取り、声掛けを行った。ポートフォリオの「お知らせ」には、インプット・アウトプットによる授業パターン、解説レポートの提出方法および締め切り期日などを学生に提示して戸惑わないようにした。本授業では、eラーニングで知識をインプット・アウトプットする学習に主体的に取り組むことを重視し、基礎知識の補強を目指した。

2-3 プレテスト・ポストテストの問題配分について

本授業では薬学の基盤となる広範囲におよぶ知識を補強するために基礎的な内容を繰り返し学習することに主眼を置いた。国家試験出題基準をもとに基礎的な学習項目を9系列に絞り込み、表1に示した。各系列で基礎的な必須問題10問と応用的な理論問題15問の合計25問を国家試験の過去10年分から選抜して出題した。

2-4 授業アンケート調査

授業終了後、ICTを活用し、プレテスト・ポストテストによる基礎知識の補強に関するアンケート調査を実施した。アンケート実施に際しては学生に対して次のことを文章にして提示した。1) アンケート調査の目的は授業の改善であること。2) アンケートへの協力の有無や回答内容は授業に影響を与えないこと。3) 学生がそれぞれ自由意思で、回答、無回答を選択できること。4) 調査結果は学会および論文等で公開する予定であるが公開する際には個人が特定されないように配慮した。

表1. プレテスト・ポストテストにおける9系列の問題配分

系列	問題配分
物理系	必須問題 10+ 理論問題 15
化学系	必須問題 10+ 理論問題 15
生物系	必須問題 10+ 理論問題 15
衛生系	必須問題 10+ 理論問題 15
薬理系	必須問題 10+ 理論問題 15
薬剤系	必須問題 10+ 理論問題 15
病態・薬物治療系	必須問題 10+ 理論問題 15
法規・制度・倫理系	必須問題 10+ 理論問題 15
実務系	必須問題 10+ 理論問題 15

3. 結果

3-1 プレテスト・ポストテスト結果の比較

3-1-1 基礎（物理・化学・生物）系のテスト結果

9系列のうち物理・化学・生物を基礎系とし、プレテスト・ポストテストの結果を図3に示す。いずれもプレテストよりもポストテストの平均点が高くなった。各テストの得点をマン・ホイットニーのU検定で比較した結果、物理系 ($p<0.01$) と化学系 ($p<0.01$) ではプレテストの平均点よりもポストテストの平均点が有意に高くなった。ICTを活用し、eラーニングによるプレテスト・ポストテストで基礎知識を繰り返し補強した成果が示されたことになる。

3-1-2 医療（薬理・薬剤・病態薬物治療）系のテスト結果

薬理・薬剤・病態薬物治療を医療系とし、プレテスト・ポストテストの結果を図4に示す。医療系3系列では、いずれもプレテストの得点よりもポストテストの平均点が高くなった。各テストの得点をマン・ホイットニーのU検定で比較した結果、薬理系、薬剤系、病態薬物治療系のいずれもプレテストの平

均点に比べポストテストの平均点が有意に高くなった ($p < 0.01$)。

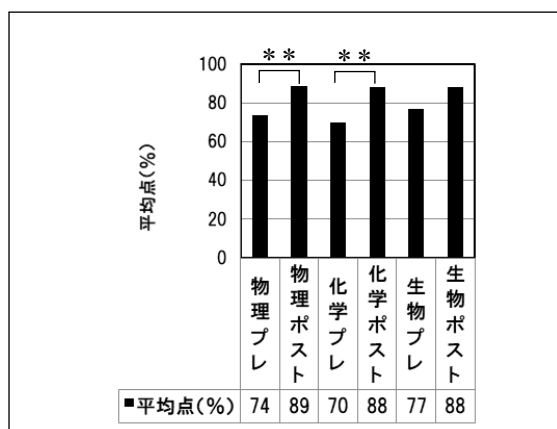


図3. 基礎 (物理・化学・生物) 系のプレテスト・ポストテストの結果
 ** $P < 0.01$. Mann-Whitney U-test. (n = 18)

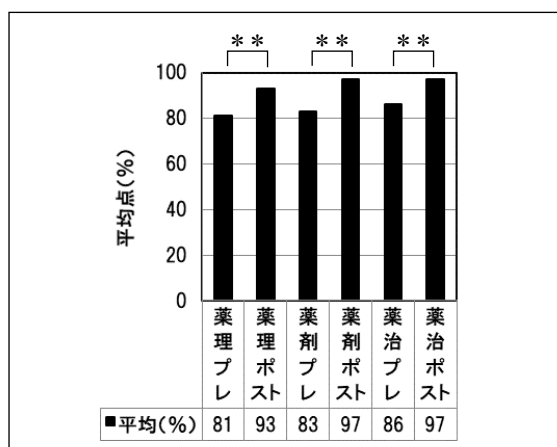


図4. 医療 (薬理・薬剤・病態薬物治療) 系のプレテスト・ポストテストの結果
 ** $P < 0.01$. Mann-Whitney U-test. (n = 18)

3-1-3 実務 (実務・衛生・法規制度倫理) 系のテスト結果

実務・衛生・法規制度倫理を実務系とし、プレテスト・ポストテストの結果を図5に示した。実務系3系列では、いずれもプレテストの平均点よりもポストテストの平均点が高くなった。各テストの得点をマン・ホイットニーのU検定で比較した結果、衛生系および実務系では、プレテストの平均点よりもポストテストの平均点が有意に高くなった ($p < 0.01$)。

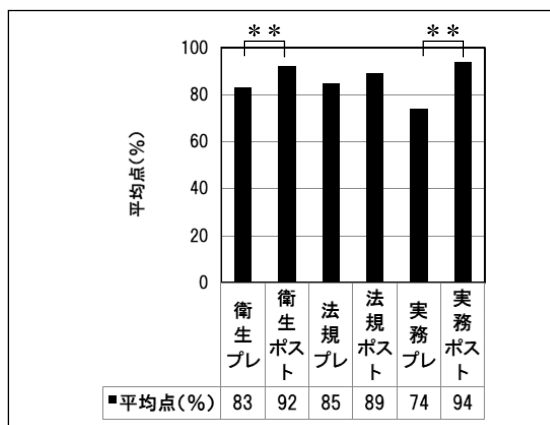


図5. 実務 (実務・衛生・法規制度倫理) 系のプレテスト・ポストテストの結果
 ** $P < 0.01$. Mann-Whitney U-test. (n = 18)

3-2 アンケート調査結果

3-2-1 ICTを活用した自己学習時間

ICTを活用し、プレテスト・ポストテストによる基礎知識の補強に関する授業評価をアンケートから調べた。ICTを活用した自己学習における学習時間についての回答結果を図6に示す。図6では、テスト前の事前学習の方がテスト後の事後学習に比べ多くの時間をかけているように見えるが、平均時間を算出した結果、事前学習が97分、事後学習が93分、事前学習・事後学習の総時間は125分となり、事前学習と事後学習では、平均時間数にあまり差がないことが分かった。

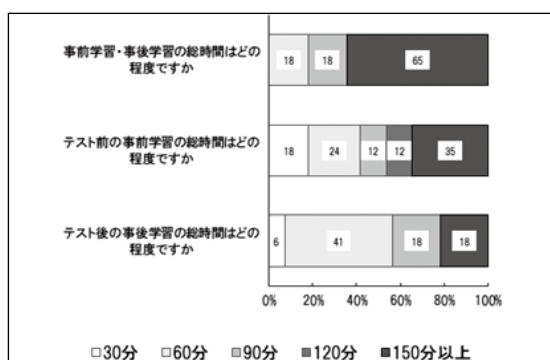


図6. ICTを活用した自己学習時間

3-2-2 ICTを活用した学習教材と学習方法

ICTを活用した学習教材と学習方法について尋ねた回答結果を図7に示す。「問題集で問題を解き解

説を読む」が24%、「ESSで問題を解き解説を読む」が41%、「PESSで問題を解き解説を読む」が18%、「インターネットにある国試過去問を解き解説を読む」が18%、「ひたすらESSで問題をたくさん解く」は0%であった。ここで、PESSとは、Pharmaceutical Education Support Systemのことで、従来本学でPCを利用して国家試験過去問を学習する際に利用しているシステムである。遠隔授業を実施する場合、すべての学生に対して安定した学習環境を提供することが必要である。しかし、学生が個人で利用するPCの場合、インターネットの環境や設定・機種によりeラーニングに対応できないことがある。

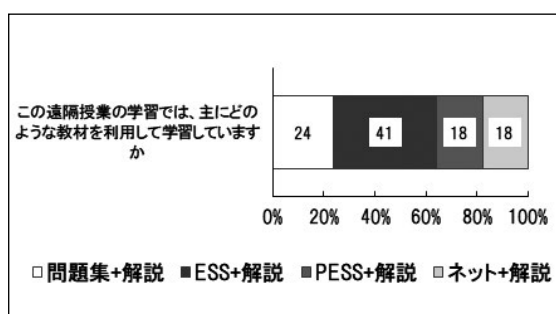


図7. ICTを活用した学習教材と学習方法

そのため本年度は、遠隔授業ですべての学生に対して安定した学習環境を提供することが可能なモバイル版であるESSの利用を推奨した。しかし、アンケート結果から、紙ベースの問題集を利用した学生が24%、PCを利用した学生が18%で、推奨したESSを利用した学生は41%であった。

3-2-3 基礎知識の習得に役立つ学習方法

基礎知識の習得に役立つ学習方法について尋ねた回答結果を図8に示す。「事前学習⇒プレテスト⇒レポート⇒事前学習⇒ポストテスト⇒レポートを繰返すことで知識の習得に役立った」については肯定的な回答である「そう思う」、「やや思う」の合計割合(%)が94%で、次に「プレテストだけでなく、もう一度ポストテスト前にも勉強したので知識の習

得に役立った」は82%であった。「不正解問題の解説を記述することで間違えていた(不足していた)知識の習得に役立った」については100%と全員が肯定的な解答であった。プレテスト・ポストテストの導入および事後学習(不正解問題の解説を記述)することが知識の習得に役立っていることを多くの学生が肯定的にとらえている結果となった。

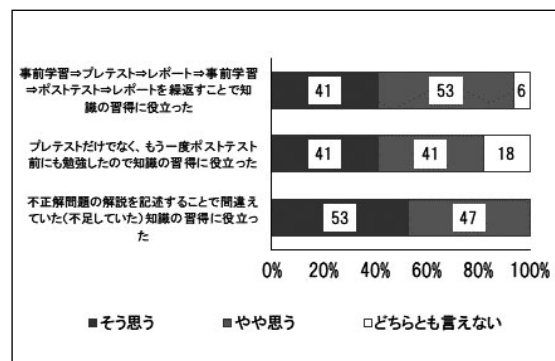


図8. 基礎知識の習得に役立つ学習方法

3-2-4 知識の習得に役立つ学習法とテスト実施時間

知識の習得に役立つ学習法とテストの実施時間について尋ねた回答結果を図9に示す。「化学系では反応式や構造式を書くことで解く過程が確認でき知識の習得に役立った」の肯定的回答は94%と高い。次に「物理系では計算式を基に解答を算出することで解く過程が確認でき理解を深めることができる」が88%となり、全体的に肯定的にとらえていることが分かる。「テスト実施時間で、25問題を30分で解答するのは、かなりきつく時間が足りない」では肯定的回答の合計割合が70%とかなり高くなった。

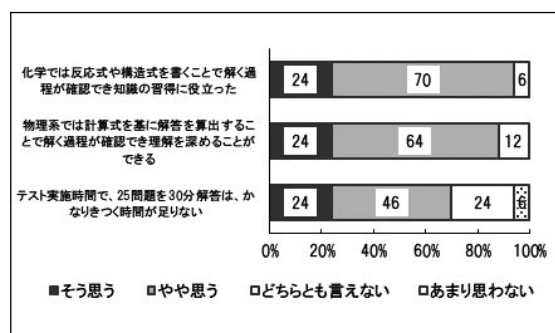


図9. 知識の習得に役立つ学習法とテストの実施時間

3-2-5 国家試験過去問題を利用した学習

国家試験の過去問題学習について尋ねた回答結果を図10に示す。「国試問題をたくさん解いたので、国試にどのような形式で出題されるか確認できた」の肯定的回答は88%と高い。「国試問題をたくさん解いたので、どの程度の難易度で出題されるか確認できた」が82%、「国試問題をたくさん解くことができたので、6年生になった際、この経験を活かして、知識を付けていきたい」では100%となり、全員が肯定的回答となった。

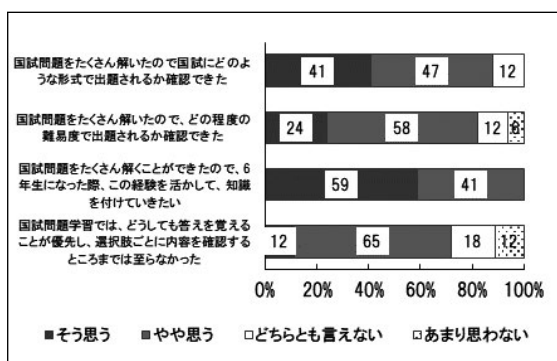


図10. 国家試験過去問題を利用した学習

「国試問題学習では、どうしても答えを覚えることが優先し、選択肢ごとに内容を確認するところまでは至らなかった」では肯定的回答が、77%となった。

3-2-6 国家試験問題の難易度の印象

国家試験問題の難易度について尋ねた回答結果を図11に示す。「国試・必須・問題をたくさん解き、どの程度の難易度だと感じましたか」では、「難しい」が35%、「やや難しい」が24%、「どちらとも言えない」が12%、「やや容易」が29%、「容易」は0%で、必須問題の難易度の印象について、ばらついた結果となった。一方、「国試・理論・問題をたくさん解き、どの程度の難易度だと感じましたか」では、「難しい」が76%、「やや難しい」が24%となり、理論問題については全員が難しいと捉えていることが分かった。

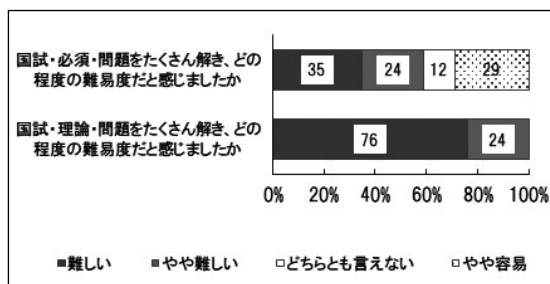


図11. 国家試験問題の難易度の印象

3-2-7 ICTを活用した自宅学習について

遠隔授業における自宅学習について尋ねた回答結果を図12に示す。「テスト後に学習を振り返り、学習の進捗を報告することは学習のモチベーションを高めることに役立った」の肯定的回答は82%で、「この授業で自分なりに学習ができ知識の補強ができたのではないかと思う」は70%、「この授業で自分なりによく頑張った勉強できたのではないかと思う」は、82%と肯定的回答が高い結果となった。

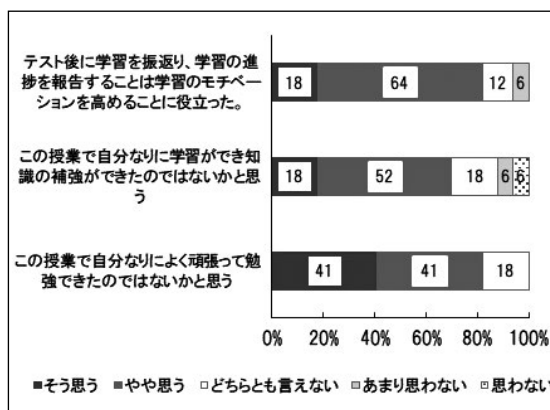


図12. ICTを活用した自宅学習

4. 考察

ICTを活用し、プレテストとポストテストを組み合わせた授業を行い、テスト後に学習を振り返る機会を設け、学習の進捗を確認するという学習支援プログラムを導入し、教育実践した結果について考察する。

今回、ICTを活用し、プレテストとポストテストを組み合わせたプログラムの導入について尋ねたアンケート結果では、肯定的回答が94%と高かった。プレテスト・ポストテストを組み合わせたことによ

り、事前・事後で繰り返し学習が行われ、知識を習得する上で効果があると捉えていると思われる。また、プレテストとポストテストを組み合わせることで、1週間の平均事前学習時間は97分、事後学習時間は93分、事前学習・事後学習の総時間は125分となり、この授業に対する1週間の学習時間が確保されたと思われる。しかし、学習時間が確保されたということだけでは、単純に学習の効果を推測することは難しいかもしれない。7つの系列においてプレテストとポストテストで平均点が有意に高くなったことから、時間をかけて繰り返し学習が行われた成果が表れたものと考えるのが妥当であろう。

ICTを活用し、主体的に学ぶ力を育てていくためには個別学習時間の確保は重要な要因であり、一人ひとりが時間をかけて十分な自己学習をすることが必要である。今回、本授業の終了後、定期試験で不合格であった2名の事前学習時間と事後学習時間を合わせた総時間をアンケートから調べたところ、いずれも60分と回答し、平均時間の半分程であった。このことは単なる偶然とは思われない。プレテストとポストテストの繰り返し効果を高め実りある学びにするためには、まず個人学習が十分にできていることが前提として求められる。それができていないと知識のインプットとアウトプットによる学習効果が見込めず、広範囲におよぶ基礎知識の補強に至らなくなると考えられる。

スマートフォンやタブレットを利用したICT教育を導入する際に、学生の学業成績を問題視し、eラーニングは、個人学習となるため成績不振学生には適さない方法との発言が教員から聞こえてくることがある。本授業では、eラーニングで学習し、テスト後に学習を振り返る機会を設け、学習の進捗状況を確認するという学習支援を行った。「テスト後に学習を振り返り、学習の進捗を報告することは学習のモチベーションを高めることに役立った」の質問では、82%という高い肯定的回答となった。学生の

学習状況を教員が確認し、それに対応するコミュニケーションを取ることが、学生たちの学習のモチベーションを維持することに役立っているものと思われる。

今回、成績不振学生に対してICTを活用し、プレテスト・ポストテストを組み合わせることで学習時間が確保されたことで学習効果の向上が見られた。このことから、本プログラムは成績不振学生に対しても十分に活用できるものであると考える。

本年度、成績不振学生教育の一環としてICTを活用し、プレテスト・ポストテストを組み合わせたプログラムを実践した。成績不振学生に対しても適切なプログラムを導入し、教員が熱心にサポートすることで成績不振学生の学習効果を高めることが可能であることが検証された。今後も継続して学生を主体とした教育に向けて授業改善を行い薬学教育の質的向上に貢献して行きたい。

謝辞

本研究は名城大学MS-26学びのコミュニティ創出支援事業として多大な支援を受け実施している。紙面を借りて名城大学関係各位に深謝する。

参考文献

- 1) 飯田耕太郎, 永松 正, 長谷川洋一, 早川伸樹, 吉田 勉, 井藤千裕, 伊東亜紀雄, 大津史子, 加藤美紀, 奥田知将, 吉田謙二, 灘井雅行, 岡本浩一, 薬学部5年次の基礎知識の補強を目的とした学習支援に関する評価と考察, 名城大学教育年報, No.8, 17-24, 2014.
- 2) 主体的学修と質保証を目指すICT活用の教育戦略, 大学教育への提言 - 未知の時代を切り拓く教育とICT活用 -, 私立大学情報協会, 5-12, 2012.
- 3) 鷺崎早雄, Covid-19により大学ICTは新たな段階へ, 大学教育と情報, No.2, 1-2, 2020.

- 4) 飯田耕太郎, 永松 正, E-ラーニングを活用した自己学習システムに関する考察, 名城大学総合研究所総合学術研究論文集, No.9, 35-43, 2010.
- 5) 富永敦子, 向後千春, eラーニングに関する実践的研究の進展と課題, 教育心理学年報, 第53集, 156-165, 2014.

健康教養を身につけ健康づくり活動を実践・支援できる 人材の育成

梅田 孝¹⁾、金子 美由紀¹⁾、小泉 和也²⁾、水野 智博³⁾

¹⁾ 名城大学薬学部薬学科、²⁾ 名城大学経済学部産業社会学科、³⁾ 元名城大学薬学部薬学科

1. はじめに

近年のわが国の死亡統計の現状をみると死因の第1位は悪性新生物であり、続いて第2位心疾患、第4位脳血管疾患と、いわゆる三大生活習慣病が上位にランキングされている¹⁾。また、これに生活習慣病に分類される慢性閉塞性肺疾患や肝疾患の死亡数を加えると日本人の死因の約6割が生活習慣病によるものといえる。一方、平成28年度の生活習慣病10疾患に関わるわが国の医療費は医療費総額の11.2%、約4,396億円となっている²⁾。すなわち、わが国において全ての国民が健康増進を享受し、健康長寿の社会を構築していくための最大の課題は生活習慣病を如何に適切に予防、改善していくかであるといえる。

現在、地域保健活動を推進させていくなかで最も大きな課題となっているものが、これを担う人材の育成と確保であると考えられる。現在、都道府県別平均寿命が男女共に常に全国上位にランク付けされる長野県の各種保健統計の現状をみると、特に地域保健活動の担い手の中心となる人口あたりの保健師数が全国第2位となっている³⁾。また、彼らによって実行される地域保健活動から派生する各種保健統計の値も良好な状況にある³⁾。さらに、彼らによって行われる地域住民に対する健康教育も積極的であり、これにより教育、育成された地域住民がその後主体となり実施する様々な地域保健活動も非常に活

発であるといわれている³⁾。すなわち、わが国最大の健康問題である生活習慣病の予防、改善を推進し、健康寿命を延伸させていくには、地域住民の健康状況やニーズに応じ保健活動を如何にきめ細やかにやっていくかが大きな課題であるといえる。また、これを全国規模で適切に遂行していくためにはこれを担う人材の育成と拡充が絶対的な必要条件であると考えられる。

これまでも薬局、薬剤師による地域保健活動、健康指導は様々な場面、機会を通じ実行されてきたことはいままでもない。そのなかで、厚生労働省は平成28年4月1日よりかかりつけ薬剤師・薬局の基本的な機能（顔なじみの薬剤師に気軽に健康相談できる）に加え、地域住民による主体的な健康の維持・増進を積極的に支援する機能を備えた薬局を「健康サポート薬局」として認定、届出することを開始した⁴⁾。すなわち、これは全国的に不足する地域保健活動の拠点、担い手としての役割をこれまで以上に薬局、薬剤師に付託していくことを意味していると考えられる。また、この状況を踏まえると、今後の薬局、薬剤師の役割及び活動の方向性の一つとして、薬剤師が薬学をベースとした医学的知識、技能に加え健康づくり全般にわたる包括的な知識と技能を身につけ、地域保健活動の中核としてより実践的に活動していく必要があると思われる。すなわち、現在、薬局、薬剤師で行われている保健指導を健康づ

くり(運動や栄養など)に関する情報提供や相談に留まらせるものではなく、薬局が実質的に生活習慣病の予防、改善あるいは健康づくりを行う施設の一つとなること、また薬剤師自らがこれを指導する役割を果たすなど、これまでよりも一歩踏み込んだ取組や活動も必要であると考えられる。また、このような取組や活動が今後の薬局、薬剤師に対する社会的ニーズの高まりをもたらしと共に、理想的な健康社会の構築の一助となる可能性もあると考えられる。

2. 本学薬学部における健康づくりを担う人材の育成

薬学部健康・スポーツ科学研究室(以下、当研究室)は本学部において一般教養科目を担当する研究室ではあるが、平成26年度より前章で述べた背景を踏まえ、本学部生が卒後、薬剤師として薬局等で地域保健活動(健康づくり)の担い手として活躍できる人材となることを目指し、担当する既存講義の内容を見直し一部改変した。すなわち、この担い手として身につけるべき健康教養と健康づくりに関わる知識と技能の習得を目指す講義を、与えられた一般教養科目枠のなかで試行することを開始した。また、平成28年度からは、これに関わる活動・研究内容を卒業研究とすることを希望する学生を当教室ゼミ生として受入れを始めた。

- 1年次講義「健康・スポーツ科学理論」(座学):健康づくりと運動指導に関わる基礎的知識と理論を身につける
 - 1・2年次講義「健康スポーツ科学I・II・III・IV」(実技):講義の一部を通じて健康づくりの実践と運動指導の基礎的技術を身につける
 - 5年次講義「運動療法」、「発展キャリア形成」(座学・実技):健康づくりと運動指導の応用力を身につける
 - ◆ 3年次「(公財)日本体操協会公認一般体操指導員養成講習会」(春休み期間、希望者のみ):運動指導の専門的知識と技能を身につける(過去4年間で200名超が取得済)
- ↑
上記の知識・技能を生かした健康・運動指導の実践能力を身につける場
||
◆ 健康・スポーツ科学研究室主催の「健康実践教室」(H27年度～)
- ✓ 目的:地域住民(約30名)の健康の維持、増進を目指す
 - ✓ 実施期間:前期・後期それぞれ3ヵ月間(約12回)、週1回1時間の教室
 - ✓ 指導員:教員、健康・スポーツ科学研究室ゼミ生、一般体操指導員有資格学生、その他参加希望学生・薬剤師など

図1. 本学薬学部における地域保健の担い手となる薬剤師の育成

図1は当教室で実施している健康づくりに関わる講義とその位置づけを示している。具体的な内容は、

1年次講義「健康・スポーツ科学理論」(座学)では健康づくりと運動指導に関わる基礎知識と理論を身につけることを目指す。また、1・2年次講義「健康・スポーツ科学I・II・III・IV」(実技)では講義の一部を通じて健康づくりの実践と運動指導の基礎的技術を身につけることを目指す。さらに、5年次講義「運動療法」、「発展キャリア形成」(座学・実技)では健康づくりと運動指導の応用力を身につけることを目指すとしている。また、これらに加え、主に3年次学生を対象に「(公財)日本体操協会公認一般体操指導員養成講習会(受講希望者のみ)」を毎年春休み期間に開講し(終日3日間)、受講者は運動指導の専門的知識と技能を身につけ、「(公財)日本体操協会公認一般体操指導員」の資格を取得している(表1)。なお、同資格は過去4年間で在校生、卒業生を合わせ200名超が取得している。また、卒業生のなかには在学中に習得したこれらの知識、技能を生かし、既に薬剤師として地域保健活動を実践し始めている者も出てきている。

表1. 平成30年度(公財)日本体操協会公認一般体操指導員養成講習会日程

	第1日目 2月4日(水)	第2日目 2月7日(木)	第3日目 2月8日(金)
8:40	受付	受付	受付
9:00	体操の歴史 I-① (講義1h)	体操の基本的な動き・基本姿勢 (講義1h)	マネージメント論 I (講義1h)
10:00	体操の歴史 I-② (講義1h)	目的・対象に応じた指導 I-① (講義1h)	マネージメント論 II (講義1h)
11:00	体操の種類 (講義1h)	現代における体操の意義 I (講義1h)	指導計画の立案・実施・評価 (講義1h)
12:00	昼食・休憩		
13:00	体操の特性 I-① (講義1h)	手具 I-② (実技1h)	手具 I-④ (実技1h)
14:00	手具 I-① (実技1h)	手具 I-③ (実技1h)	手具 I-③ (実技1h)
15:00	手具 I-② (実技1h)	器具 I-① (実技1h)	器具 I-② (実技1h)
16:00	手具 I-③ (実技1h)	器具 I-③ (実技1h)	指導法 I (実技1h)
17:00	実践指導① (実技1h)	器具 I-② (実技1h)	【試験】
18:00	実践指導② (実技1h)	器具 I-④ (実技1h)	
19:00	実践指導② (実技1h)		

● 自宅学習および実習 (10時間分)
 ・ 現代における体操の意義 I (1時間) ・ 体操の種類 (1時間) ・ 体操と音楽 I (1時間) ・ 指導法 I (1時間) ・ 目的・対象に応じた指導 I-④ (4時間) ・ 発展実習 (2時間)

一方、我々は本学部生が在学中に得たこれらの知識・技能を生かし、健康・運動指導の実践能力を身につける場として本学主催の「健康実践教室」(H27年度～、対象者(受講者):30名、前期・後期それぞれ約3ヵ月間(約12回)、週1回1時間の教室)を開講している^{5), 6)}。また、その目的は本学部生を地域保健活動の担い手として育成すると同時に、本学の地域貢献事業の一つとして地域住民の健康の維持、増進を目指すこととしている。また、この教室

における運動・健康づくりの指導は我々を含む本学教員と将来、薬剤師として地域保健活動を実施していくことを希望する当研究室ゼミ生、一般体操指導員有資格学生、その他低学年の参加希望学生や、以下に説明する現役薬剤師などにより行われている。

3. 卒業生（現役薬剤師）に対する地域保健活動の支援

図2は、我々と本学卒業生を中心とした現役薬剤師との連携による地域保健事業と「健康サポート薬局」開設、運営に関する支援の内容を示している。また、我々はこの活動を本学卒業生の卒業教育の一つとなると考えている。

- ※愛知県・地域薬剤師会との取組み
- ① 愛知県及び地域薬剤師会依頼による健康づくりに関する講演、各種健康イベント、体操教室などを実施
 - ② 【健康体操を提案できる薬剤師育成研修会】(健康づくりの理論と実践に関わる座学と実習)
 - ③ (公財)日本体操協会公認一般体操指導員養成講習会の受講者希望者の受入
 - ④ 本薬学部「健康実践教室」での研修希望者の受け入れ
- ※地域薬局との取組み
- ① 地域薬局依頼による健康づくりに関する講演、各種健康イベント、体操教室などを実施
 - ② はるか薬局山里支店(名古屋市内)における健康教室開設及び活動支援
 - ③ 浅井薬局橋店(津島市)における健康教室開設及び活動支援
 - ④ 石川薬局(高浜市)における健康教室開設及び活動支援
 - ⑤ プラスアルファ薬局(半田市)における健康教室開設及び活動支援
 - ⑥ 陽明調剤薬局(名古屋市内)における健康教室開設及び活動支援

図2. 愛知県・地域薬剤師会及び地域薬局との連携による地域保健事業と健康サポート薬局開設、運営に関する支援

愛知県・地域薬剤師会との取組みとしては愛知県及び地域薬剤師会依頼による健康づくりに関する講演、各種健康イベント、体操教室などを受託、実施している。また、愛知県薬剤師会が主催する【健康体操を提案できる薬剤師育成研修会】を受託、開講し、参加した薬剤師に「健康サポート薬局」開設に向けた健康づくりの理論と実践に関わる内容を座学と実習を通じ研修させている。また、本研修会を受講し、先に説明した「(公財)日本体操協会公認一般体操指導員養成講習会」の受講を希望する者(一部)を当該講習会に受け入れている。

一方、地域薬局との取組みとしては地域薬局依頼による健康づくりに関する講演、各種健康イベント、体操教室などを受託、実施している。また、個々の地域薬局との連携として図3の手順(例)に従って、

はるか薬局山里支店(名古屋市内)、浅井薬局橋店(津島市)、石川薬局(高浜市)、プラスアルファ薬局(半田市)、陽明調剤薬局(名古屋市内)における健康教室開設及び活動支援を行っている。また、これら薬局の薬剤師の実務研修機会として本学「健康実践教室」への受入れも行っている。一方、連携する薬局との共同研究としてこの活動の有効性を検証した結果、教室参加者の健康づくりやポリファーマシーの予防、改善に有効であること、またこの活動そのものが有益であることが明らかとなっている⁷⁾。

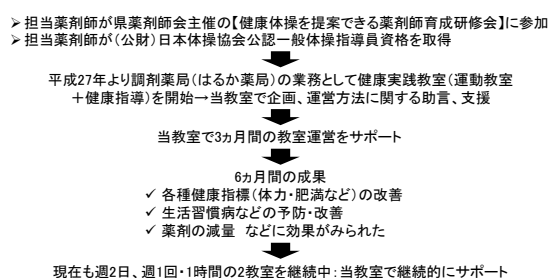


図3. はるか薬局山里支局(名古屋市内)での取り組み(例)

4. 健康づくり運動及び地域保健活動の推進・支援のための教材制作

我々は令和元年に一般住民が健康づくり運動を自ら実践、あるいは本学部生及び薬剤師等がこれを指導する際に活用できるDVD教材・「健康サポート体操(約60分)」をNHK番組「おかささんといっしょ」第10代たいそうのおにいさん・佐藤弘道氏の協力・支援により制作した。その内容は健康づくり運動の三本柱である「筋力・柔軟性・持久力」に関わる10項目のトレーニングメニューで構成され、誰でも、いつでも、手軽に、正しく健康づくり運動を実践、指導できるような教材となっている。また、現在、本教材は本学での講義や「健康実践教室」で利用すると共に、先に紹介した地域薬局の健康教室やその他の地域で実施されている健康づくり活動でも活用されている。

おわりに

以上のように、我々が試行しているこれらの活動

は薬学教育のなかでは新たな取組み、教育・研究分野であると考えられる。また一方、我々はこれらの活動を実践、経験していくなかで、一般住民の「健康サポート薬局」に対する社会的ニーズや期待は非常に高いと感じている。

一方、前述した「健康サポート薬局」の認定、届出件数の現状をみると、1,787件（令和元年12月27日時点）と日本薬剤師会が目標とする約15,000件の1/10程度に留まった状況となっている。また、これに関して我々が研修会等で接する薬剤師を対象に積極的に「健康サポート薬局」を認定、届出できない要因をアンケートより調査したところ、①通常の薬剤師業務の繁忙さ、②健康サポート薬局の認定手続きの煩雑さ、③具体的な健康サポート活動（運動や栄養指導など）の実務経験の無さ等を挙げていた⁸⁾。また、これに関して我々はこれまでの活動を通じ現役薬剤師に対して前述した②の一部と③のサポートは十分可能であると考えている。

したがって、我々は、現在試行している本学部生や卒業生に対する教育・研究活動を今後も継続していくことが、地域保健活動を担うための知識と技能、またこれに関する社会的観点を持つ薬剤師の育成の一助となると考えている。さらに、我々はこれらの活動が、わが国の生活習慣病の予防・改善対策や健康づくり対策の一翼を担う「健康サポート薬局」の認定・届出の拡充につながる手立ての一つになればと考えている。

参考文献

- 1) 厚生労働省：平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況。（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/dl/gaikyou30.pdf>）最終アクセス日2020年6月9日（last access on 9 Jun 2020）
- 2) 健康保険組合連合会：平成28年度生活習慣病医療費の動向に関する調査分析。（https://www.kenporen.com/toukei_data/pdf/chosa_h30_05.pdf）最終アクセス日2020年6月10日（last access on 10 Jun 2020）.
- 3) 長野県：健康長寿プロジェクト・研究事業。（<https://www.pref.nagano.lg.jp/kenko-fukushi/kenko/kenko/kenkochojupj.html>）最終アクセス日2020年6月10日（last access on 10 Jun 2020）.
- 4) 厚生労働省：かかりつけ薬剤師・薬局について、健康サポート薬局。（https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iyakuhin/yakkyoku_yakuzai/index.html）最終アクセス日2020年6月10日（last access on 10 Jun 2020）.
- 5) 伊藤成美, 水野智博, 金子美由紀, 神田翔太, 夏目彩佳, 辻村有輝, 新田秋大, 吉見亮哉, 成瀬真希, 梅田孝. 3ヵ月間の健康実践教室の参加が高齢者の健康関連QOLに及ぼす影響について. 体力・栄養・免疫学雑誌 2018; 28 (2) : 106-107.
- 6) 新田秋大, 戸塚学, 小嶋新太, 小川武志, 奥村俊樹, 福井真司, 廣瀬かほる, 梅田孝. 3ヵ月間のトレーニングが高齢者の体力・身体機能に及ぼす影響について. 体力・栄養・免疫学雑誌 2019; 29 (2) : 96-97.
- 7) 鍋谷伸子, 田中佑実, 山下夏季, 對馬遼, 吉岡憲吾, 梅村紀匡, 安田宜成, 永松正, 梅田孝, 水野智博. 薬局内での「体操」を用いた健康実践教室の有用性の検討. 日本薬剤師会学術大会講演要旨集 2016; 49回: O-09-20-22.
- 8) 金森弘一郎, 水野智博, 北村菜々子, 吉岡遼, 永松正, 梅田孝, 大島秀康. 薬局における運動指導を目的とした研修会の導入. 日本薬学会年会要旨集2017; 137年会4号: 234.

Challenges and Possibilities of Online English Education

Yuri Nishio ¹⁾ Gregory Minehane ²⁾ Hideo Yanagisawa ³⁾ Paul Wicking ⁴⁾

Max Praver ⁵⁾ Arata Miyazaki ⁶⁾ James Rogers ⁷⁾

Meijo University Faculty of Foreign Studies

1. Introduction

The Faculty of Foreign Studies (FFS) was established in April 2016 as the ninth faculty of Meijo University. It aims to develop students as global communicators to be able to exchange their ideas or thoughts by using English for practical purposes. The FFS consists of an all-English core language program focusing on English listening, speaking, reading, and writing skills in addition to fostering critical thinking skills through task-based learning. During their undergraduate program in the FFS, students will take Communication I-V, Reading I-V, Writing I-V, Discussion I-IV, Public Speaking, and Debate courses. Each course is standardized and administrated by a course coordinator. In addition to the aim of developing their English proficiency via these courses, active learning methods utilized in them, such as pair and group work, function to give students opportunities to interact with each other. This gives them a chance to experience real hands-on communication.

However, by the end of March of 2020, COVID-19 had spread around the world and Meijo University decided to conduct its classes online for all courses, so each course coordinator had to make new online

syllabi and materials in a relatively short time. There were critical challenges because this prevented students from experiencing the usual communication that would occur in face-to-face classes. This paper reports on how each coordinator dealt with such difficulties to provide the best possible education online.

2. Communication I · III · V

English Communication I, III, and V were taught in the first semester of 2020 and are all English core skill courses in the FFS. Additionally, they are the only classes to be held twice a week. As the name suggests, the main focus of English Communication is oral interaction and consequently, in the regular face-to-face classroom environment, a great deal of time is devoted to student practice and production of English language in natural conversation. The classes' goals and aims could not be easily met by online asynchronous lessons. Even if the technical limitations of the 'on-demand' class could be overcome, the nature of the typical lesson is such that there is very little lecturing done by instructors, so there is almost no content that could be appropriately recorded for playback by students. Similarly, while WebClass, a

1) Sections 1, 3, and 7
5) Section 2

2) Section 2
6) Section 6

3) Section 3
7) Section 4

4) Section 5

learning management system (LMS) used at Meijo University, was useful for assigning homework, and it did have a synchronous written messaging feature, it was not designed for conversation. Lecturers of the English Communication classes see themselves as facilitators and organizers of student interaction through dynamic classrooms. They model target language, but they also listen, correct, and respond to student utterances. Without direct, real-time interaction, with and among students, it would be very difficult to believe that the class was following the spirit of the communication syllabus.

The English Communication class teachers were of one mind in regards to how they saw the limitations of online learning due to COVID-19. Consequently, to make the most of this difficult situation, they embraced the use of Zoom in their classes. Most instructors had never used Zoom before, and while they were familiar with the use of Skype, Meet, and Line, Zoom proved to have greater functionality for the English language classroom. In particular, the use of ‘Breakout Rooms’ was essential. To hone their skills, instructors used each other as students prior to the commencement of classes in late April and practiced how to create a more seamless and professional experience for students. While it is well documented that many students initially had problems creating a suitable Internet environment that could cope with video, it was our experience that almost everyone was able to do this in a relatively short period of time. Of course, there were instances of poor Internet connectivity over the semester, but overall, we believe the benefits of using Zoom greatly outweighed the drawbacks of setting up and becoming acquainted with this new system.

In April 2020, first year students didn’t know each

other and were keen to make friends. After overcoming their initial period of shyness, they were able to see each other (mask-free), introduce themselves, and converse more naturally through Zoom. We believe this helped students create a sense of camaraderie which eventually led to friendship. This in turn helped the instructor to run the class in a more enjoyable and productive manner. When face-to-face classes did begin, students felt as though they weren’t meeting for the first time. Through Zoom, teachers could model dialogue, listen to and correct the spoken errors of students, and ask and answer questions from students directly. By using ‘Breakout Rooms’, students were paired with other students or put into small groups where they could practice speaking in a manner very similar to the traditional face-to-face classroom. We believe that the uptake of Zoom by English Communication class instructors led to greater student learning and satisfaction with their classes, and it also helped them to begin to form better relationships with their classmates.

A further aspect of the English Communication classes which worked well online was that students had access to a digital version of their respective textbooks. The benefits of being able to access ready-made online resources were abundant, complemented Zoom greatly, and no doubt aided the successful navigation of an online semester. Not only did these ‘digibooks’ allow students to study outside of the classroom, anywhere and at any time, they also enabled students to track their own progress and see how well new skills, grammar, and vocabulary had been mastered. Students received instant feedback through automatic grading and had the option to work with a variety of engaging pronunciation, audio, and video activities. Furthermore, teachers had the

ability to easily assign and choose from a plethora of pre-built workbook exercises, practice tests, and additional activities. Activities completed online gave the students the ability to consolidate and reinforce learning that took place on Zoom as well as progress through the textbook at their own pace. A final added benefit to the online resources was that teachers were able to easily monitor and track individual student as well as class progress with the use of an automatic gradebook.

3. Reading I • III

Reading I and III courses were designed on a 100% on-demand basis and students took those online classes for six weeks. To avoid confusion caused by both students and teachers by the sudden introduction of online classes, teachers try to make courses as unified and simplified as possible for students to understand their requirements. This was also very helpful for teachers who have several classes of different subjects and of different year students.

As a regular weekly requirement, four tasks were prepared in WebClass: (1) reading an English passage and answering questions in the set pages of the textbook, (2) doing a vocabulary quiz, (3) submitting a book report, and (4) writing about the passage in the online chat forum.

(1) Students downloaded the PDF file of the two- or three-page passage from the all-English textbook because paper textbooks were unavailable until late April. One PDF file was scheduled to appear every week followed by the answer key a week later to help students with self-study.

(2) For each vocabulary quiz, ten words were selected from 20 target words in the passage in each PDF so that students could prepare for it. This task

was implemented through the test-making function in WebClass in the form of multiple-choice questions.

(3) Ten book reports were required in total during the semester. While Global Plaza was unavailable, this task was the alternative to ER (Extensive Reading), which had been one of the regular tasks of the Reading course until the last academic year. Under difficult conditions, BookLooper, an application for e-book reading, was introduced to students. Video instructions, recorded with the Zoom record function, helped students to understand how to use the app.

(4) As a requirement from the university, students needed to make a comment in the forum of WebClass as evidence of attendance. In the Reading I course, students wrote a sentence that impacted them the most from the passage, while in the Reading III course students wrote their own opinion on the theme of the passage.

The simple design of the tasks helped to avoid serious trouble during all the confusion of the first six weeks. Of course, we accept that this approach may have appeared a little more hands-off than other English courses. Though students could ask questions through the Q & A chat corner placed in WebClass, it would have been better if it was more interactive. Nevertheless, the Reading courses adopted the most pragmatic approach for both students and teachers who were struggling with major disruptions to teaching and learning at the beginning of the year.

The regular on-demand basis classes had been conducted smoothly. One of the biggest challenges was how to evaluate students' achievements of their reading skills, which were implemented as paper-based mid-term and final exams. For conducting this, a mid-term assignment and a final assignment were provided in WebClass. They accounted for 20 and 30 percent of

the total score, respectively. The questions covered in the textbook focused on several contemporary topics, such as immigration, internationalization, media, or education. One unit has three or four readings related to the topic, reading strategies, and vocabulary to learn. The assignments included a 30-point vocabulary section (1 point×30 questions), a 10-point sentence order section (2 points×5 questions), a 20-point strategies section (2 points×10 questions), and a 20-point comprehension section (2 points×10 questions) for a total of 80 points. All questions consisted of multiple-choice questions administered from the 'Assessment' section of WebClass. The correct answer was set for each question. The students selected one choice from the possible answers and pressed the next button to go to the next question until they finished all the questions. The scores were automatically graded and a teacher could check them by looking at 'Results of the Performances' section of WebClass.

We carefully considered how to assure equality of the WebClass-based assignments so that the students did not do things such as unfairly looking at their textbook, dictionaries, or any references. In the previous weeks, the notification of the mid-term or final assignments such as the day and the time, the content, and notes that explain students should not use any references were posted in the 'forum' section of WebClass. On the previous day, the information of the assignment was emailed by using 'Message' (a mailing system of WebClass) to all students who were taking Reading I or III unless they had a valid reason to miss the assignment. The exam time was 60 minutes, though the site was open for 120 minutes just in case any students could not access it at the beginning of the regular class time. As a result, 81

percent of students had accessed the assignment in the regular class time and finished within 60 minutes, while 19 percent of students who had wifi or system errors took a make-up assignment afterward. Their scores were also quite similar to the paper-based test in the previous semester. Therefore, the online assignment was judged as fair and reliable.

The online Reading I and III provided all materials and answers on WebClass, and the assignments were conducted without any issues, so the students studied autonomously.

4. Writing I · III

The need to conduct courses online in the spring of 2020 presented a number of challenges for Writing I course, but also created the opportunity for new discoveries to be made. One such discovery was how useful the online video conferencing software Zoom is. Features such as its 'Breakout Rooms' gave students a chance to interact with each other, which was something they desperately missed as they spent more and more time in their homes. This feature not only provided this much-needed interaction, it also enabled students to easily be grouped with students other than those sitting in their general vicinity. Learning about such interesting features of software such as Zoom proved to be a worthwhile discovery during what was otherwise a difficult adjustment time for both teachers and students.

Another discovery made during the semester online was in regard to how to present materials to students. A new supplementary textbook was introduced when courses went online, and thus there needed to be a way to ensure students were studying the content properly. Weekly quiz questions were created and it was decided to distribute these via Google Forms. Using this

software proved to be helpful, but after reflecting on how it was used after the semester was over, it was evident that some improvements could be made. It was decided to improve upon them by adding answers to each question which would give students instant feedback on whether or not they got the answer correct. Previously, answers were provided a week later in a separate document and this was clearly an improvement. In addition, the Google Forms would be distributed within Google Classroom. This enabled automatic grading and scheduling of assignments and better overall organization. Making these improvements turned out to be a blessing in disguise in that some teachers felt that the supplementary materials took up too much class time.

In Writing III, there were challenges faced as well when classes were conducted online. Many teachers usually opt to have free writing activities as a warm-up at the beginning of each class. While students write, teachers usually walk around and give students feedback as they write. With online classes, this cannot be as easily accomplished. While it is true that students can do these activities and submit them online after they are done writing, such a method does not allow for real-time feedback, and thus, there is the potential of error fossilization to occur as students repeat the same mistake over and over as they write without instant feedback to stop it from repeating.

Another issue was the extended amount of time that both students and teachers must stare at computer screens. In comparison to Writing I's goal of paragraph writing, Writing III focuses on essay writing. Students must write three longer essays as opposed to five paragraphs. Thus, instead of time spent in front of the computer screen broken up into five sessions, it becomes three much longer sessions. In

addition, the total words written in Writing III is significantly more than in Writing I. In Writing I, five 175-word paragraphs must be written, totaling 875 words. In Writing III, three 650-word essays must be written, totaling 1,950 words. So, students are spending more time staring at a computer screen, which can have a detrimental effect on their eyes, back, and neck. During face-to-face classes, many teachers opt to have students print their essays and check them on paper to avoid such negative physical effects of extended computer usage. However, with classes online, teachers usually end up checking the essays without printing them because, if they did, they would then have to rescan each essay, which would be time-consuming.

So, in general, while there were some positive discoveries made in courses such as Writing I, these issues mentioned above that were present in Writing III are evidence of basic virtues of face-to-face classes that online classes simply cannot replicate. Thus, it was found that while in specific situations, online courses can be viable and sometimes even preferable, this is not always the case, and thus certain types of courses or certain aspects of courses should be conducted face-to-face whenever possible.

5. Discussion I • III

Out of all the core English subjects, perhaps it was the Discussion course which faced the biggest challenge in moving online. Discussion is essentially a skill of real-time language processing in which meaning is exchanged not merely through words, but also through pronunciation, intonation, facial expression, and body language. As such, in its essence, it is uniquely unsuited to an online format.

However, the widespread pandemic has changed

the way people talk to each other at least for the foreseeable future. Families, businesses, schools, government departments and other groups have rushed to bring meetings and conferences and even social engagements online, compelling people to interact with the world through their computer screen or smartphone. It appears as if skill in online discussion is something that global citizens in the 21st century will need.

The first decision that was made, in consultation with the Discussion course teachers, was to hold our lessons online in real-time as soon as possible. From the outset, students were asked to make a Zoom account and to attend online classes each week, held according to the regular scheduled timetable. Discussion activities that would usually be done in face-to-face classes were thus able to be done online in this fashion.

In practice though, there were many students who were not able to join real-time lessons every week, and so we needed an on-demand component that would allow students to both acquire knowledge and develop skills for discussion. This on-demand component had three strands: in-house published materials, use of a video exchange platform, and online language tasks.

5.1 In-house Published Materials

In the previous year, a textbook had been designed and created by the Discussion I (first year) teachers for use in the course. It contained 15 units, with topics for discussion, vocabulary, and language learning activities. As this was published in-house, there were no copyright issues, which allowed us to put all the content online.

In Discussion III (second year), there is no set textbook. The entire course content is collected into a series of Powerpoint slides. Students copy down

information from the slides into notebooks, while teachers use the slides to provoke discussion and guide speaking activities. There were likewise no issues of copyright with the slides, and so they were able to be used in the Zoom lessons and also given as PDFs to the students.

5.2 Video Exchange Platform

For the past few years, a video exchange platform (Flipgrid) has been used in the Discussion classes. This allows students to create and post audiovisual material to a secure forum. In the Discussion I course, students were required to respond to a question prompt, based on the self-published textbook. They made a two- to three-minute video of themselves speaking in response to the prompt, and then they replied to their classmates' videos.

In Discussion III, students were given a link to a short (less than 5 minutes) video on YouTube. They then posted a video in response to the YouTube clip, giving their own opinion on the issue, with reasons and examples. Their classmates responded to those videos, and in this way an asynchronous discussion could occur.

5.3 Online Activities

Tasks for both Discussion I and III were created in Google Forms. The Discussion I tasks were based on the readings and the vocabulary in the textbook. Tasks in Discussion III were based around the YouTube clip, asking students to record new vocabulary and expressions they had learned from the video, and also to give their opinion on the issue in a written format.

The biggest advantage of these activities was that it saved teachers a great amount of time in preparation. The workload was shared by all. It may have taken 1-2 hours to create activities for one lesson, but one teacher was able to do it for everyone. That way, there

was more time to devote to watching students' videos and replying to them. At the end of the week, all the student answers were ordered in a spreadsheet and easy to check.

6. Public Speaking

6.1 Public Speaking Online

The main focus of Public Speaking is making speeches in front of different audiences, varying in size. This is a third-year level class and is in combination with Debate in the fall semester. Students develop more advanced English skills for their argument building and public speaking in these courses, which helps them become prepared for their graduation thesis presentation in the following year.

As discussed in Murata et al. (2019), Public Speaking employs what we call *Speech Marathons* where students make a speech multiple times with different audience members. Not only does this help students cope with their speech apprehension with hands-on practice, but it also encourages them to become more attentive to their listening behaviors and feedback skills as a listener.

Even with the limitations of teaching this class online in the spring of 2020, teachers did their best to respond to the shift from face-to-face to online according to their students' needs for this subject matter. They carefully examined their students' levels and necessary pace needed for speech preparation. Some conducted lessons almost all asynchronously to provide students enough time for understanding the class materials and for their speech writing. Others tried to implement more real-time speaking practices by using Zoom, in addition to the WebClass based discussion or with other free online LMS services available, and carried out lessons as close to a 'real'

class as possible. Since this is a coordinated course with a designated textbook, it was possible for instructors to share class materials where necessary to maintain the quality of each lesson and to ease the transition to the online teaching situation.

6.2 Speaking Online and Coping With Challenges

The course was carried out with several *Speech Marathons* whenever possible and two major speech assignments, an informative and persuasive speech. Students developed both of their speaking skills by speech building and listening skills through feedback writing.

One way to cope with challenges of asynchronous, online teaching was to help students develop their speech writing skills through WebClass discussion. This was helpful for those who needed more time for speech preparation. With well-prepared speeches with extra time given, some of them could perform very well toward the end of the semester when they had adjusted themselves to the online situation mentally and technologically.

Another way was to use Zoom to conduct class almost identically as a regular lesson. Students did struggle with some aspects of online public speaking such as difficulties of maintaining eye-contact with the audience, monitoring themselves with earphones on, and receiving immediate audio feedback from their peers after performance. The visual feedback with a smile, gestures, and applause from their peers, however, worked well, and it turned out to be a great learning experience for their future speeches. Everyone seemed to have learned this new online public speaking norm by the end of the semester.

6.3 Speaking Online, New Possibilities

Doing public speaking online is not ideal, yet is it

inevitable in the future. Online meetings and conference presentations have become a new norm, so it benefits students to have had this experience. It is also possible for teachers to implement online speaking assignments even after everything goes back to 'normal,' so that students will be able to expand their possibilities for any kind of speaking situations they might encounter in the future.

7. Conclusion

When all of the core English courses went online, teachers and students had to face several difficulties and limitations to deal with the situation because all English courses are designed and organized for face-to-face classes. Each coordinator and teachers cooperated with each other to adjust the class materials, tests, and ways of teaching online in a short time preparation.

Reading and Writing were conducted through on-demand materials uploaded in WebClass or via Google Forms. As for Communication, Discussion, and Public Speaking courses, teachers used Zoom and its 'Breakout Rooms' to help students interact with each other, which helped them complete pair or group activities effectively. Such real-time technology contributed to building a sense of friendship or involvement, especially for first-year students.

Additionally, to reduce the challenges of asynchronous online teaching, teachers introduced several supplemental, ready-made online materials, such as Flipgrid.

Teachers are getting used to handling new technologies even though some struggled with some aspects of them initially. Online education might not be ideal for English courses focusing on communication or interaction. However, this

experience has shed light on a variety of possibilities for teachers and students alike.

Reference

Murata, Y., Nishio, Y., Minehane, G., Wicking, P., Praver, M., Miyazaki, A., Rogers, J., & McCandie, T. (2019). The English program of the Faculty of Foreign Studies: Commitment to results. *Meijo University Kyoikunempo* 13, 15-25.

2020年度前期新型コロナウイルス感染症禍における 体育実技科目の実践例

富岡 徹

名城大学外国語学部国際英語学科

1. はじめに

2020年10月現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が全世界で猛威を振るっている。このCOVID-19は、2019年12月に中国武漢市において原因不明の肺炎の集団感染として報告された¹⁾ことに端を発し、その後、韓国を中心とするアジア、そして2020年3月下旬からは欧米を中心に、驚異的なスピードで広がっている。我が国においては、2020年1月16日に当地に滞在歴のある男性から同ウイルスが検出され²⁾、2020年4月7日に内閣総理大臣が特措法第32条第1項に基づき、緊急事態宣言を7都府県に対して発出し、同月16日には対象地域が愛知県を含む全国に拡大された。

このような感染状況の中、多くの大学は卒業式・入学式の中止、授業開始時期の延期と遠隔授業の実施などの対応を余儀なくされたことは周知の事実である。名城大学では、2020年3月2日に第一報として感染予防と感染の疑いのある際の対応について情報が発出され、続く3月16日に前期授業の開始が4月20日に延期されることが発表された。そして、同日、授業方法としてすべての科目が在宅による遠隔授業形式で始まることが示された。その後、5月15日には、6月3日（第7週）以降実験・実習など一部の授業は対面での授業が可能となり、筆者が担当する外国語学部の「健康スポーツ科学1」（いわゆる体育実技）がそれに該当することとなった。また、

7月1日（第11週）以降、対象科目の見直し後も引き続き対面授業を行ってきた。

体育実技科目は、他の実験科目やフィールドワーク科目同様、本来教員と学生、あるいは学生同士が対面して授業を行うことを前提として教育効果を期待している。しかしながら、緊急事態宣言が発令され、すべての科目が遠隔授業に切り替えられたことに合わせ、当科目も遠隔授業にて授業を行うこととなった。また、一部対面授業に切り替わった第7週目以降も対面授業に切り替えることができた。

本報告では、オンライン学習という形態になじみにくい当該科目について、遠隔授業時においてどのように行ったのかを紹介する。あわせて、授業中の人的接触や密接、更衣室での三密の回避に十分な対策が必要とされるこの科目を、対面授業が解禁された期間にどのように行ったのか報告する。

2. 遠隔授業開始までの経緯

2月中旬ごろより、学会の中止や出張の中止命令などを耳にするようになった。3月上旬に開催される「社団法人大学体育連合」の「大学体育指導者養成研修会」に例年同様事前に申し込んでいたが、2月28日に大学より参加を見送るよう勧告があり、参加を取りやめた。全国的な体育教員のFD活動に対する支援、相互の情報交換の場として非常に有効であり、参加を楽しみにしていた。研修会自体は例年通り開

催されたものの、講演会の時間短縮や質疑応答の中止など規模が縮小され開催されたようである³⁾。

3月中旬には、前期授業のオンライン化の可能性が示唆され、研究者仲間や上記の研修会で知り合った教員間で情報交換を盛んに行うようになった。体育実技科目のオンライン化は、科目の性質を全く異質にさせるもので、お互いの知恵を出し合うこと、情報を交換し合うことで沢山の視座を得ることができた。あわせて、学部内では教授会終了後、遠隔授業に不可欠なZoomの使用法などの指導を受けることもでき、教材の提供のための方法論について学ぶことができた。大学の学習システムであるWebClassは、外国語学部において、学部設立時より積極的に活用されており、体育科目においても大きな戸惑いはなく導入することができた。

一方、ナゴヤドーム前キャンパスにある3学部には体育科目担当教員は筆者しかおらず、所属先ではない2学部に対しては兼任教員として参画するほか、授業・体育施設のマネジメントを任されている。当科目担当の非常勤講師の先生方におかれては、WebClassの使用法は全く未知のものであり、同一科目名の他コースの授業として開設されていることから、WebClassのプラットフォームはすべて筆者が構築した。同一科目において同様の授業方法である必要が指摘されており、その統一を行った。しかしながら、都市情報学部と人間学部の共同開講の形式ではありながら、科目コードが異なるため、履修者名簿が複数存在し、WebClass上のクラスが倍増することになった。すなわち、自身の担当する2クラスはWebClass上では4クラスに分割され、非常勤講師の担当する合計6クラスも同様の結果となり、自分の所属する学部以外の兼担科目に関して、16クラスの運営を行うこととなった。1クラスが単純に2つのクラスに分割されただけではあるが、通常の授業では起こらないクラス分割は、学部間協同開講の際の大きな問題であると指摘しておきたい。

3. 体育実技科目のオンライン化への対応

体育実技科目の開講目的の主眼として、運動実践による学生の健康・体力の維持・増進と、学生間交流によるメンタルヘルスの向上を意識してきた。外出自粛勧告やオンライン授業化により、学生の集合と率先して屋外で運動を行うことを促すことができなくなった。多くの大学において体育科目担当教員は、知恵を絞り情報交換に努めた。既述の「大学体育連合」からは、岡山大学の鈴木久雄教授による既存の遠隔授業体型の一つとして「岡大プログラム」が紹介された。これは、2013年度より行われているe-learningを活用した学生自らが運動プログラムを作成・実践・記録するプログラムである⁴⁾。日本中で30以上の大学より資料提供の申し込みがあったといい、筆者も資料提供をお願いし、参考にさせて頂いた。

また、新型コロナウイルス感染症についても情報を集め、運動実施の可否についても検討を重ねた。通常であれば、学生は大学での健康診断を受診し、健康上大きな問題はないという前提で、体育実技へ参加している。しかしながら、このコロナ禍においては、学生は大学で健康診断を受けていないうえに、教員が対面して学生の様子を把握しておらず、運動実践を強いることに不安を感じた。ましてや、新入学生にとっては、高校での部活動引退や高校での体育授業の終了後で運動不足が十分に予想される。それに加えて、緊急事態宣言の発令による外出自粛勧告や、心理的要因による外出の自粛により、学生の体力低下が十分に予想できた。さらには、感染のおそれのある他者との行動や屋外での運動を積極的に奨励することが憚られ、授業内容の検討に苦慮した。

結果として、オンデマンド教材として健康科学的分野の資料(表1)を提供するとともに、一人で行える運動を紹介し、自身の体力・体調を自己評価させ運動実践を促した。なお、表1において12-14回目以外は都市情報学部・人間学部で開講された科目

と共通し、この回については各スポーツ種目のコースごとの内容（例えば、筆者が担当する「バドミントンコース」では、その歴史や技術、戦術）で構成された。また、第7週以降は、本来の授業時間を半分に分け対面授業が可能になったが、遠隔授業と並行してオンデマンド資料は提供し続け、実際の運動実践に結びつく内容にアレンジした。

表1 外国語学部「健康スポーツ科学1」のオンデマンド資料のテーマ

回数	テーマ
1	ガイダンス・呼吸筋ストレッチング
2	新型コロナってなんだ？
3	COVID-19感染拡大下における身体活動
4	体格と体力の評価と改善策
5	エネルギーバランス
6	日本人の所作と思考特性
7	ウォーミングアップとクーリングダウン
8	動作のバイオメカニクス
9	有酸素運動とエネルギー代謝
10	筋肉とレジスタンストレーニング
11	労働と健康保険
12	(バドミントンの歴史)
13	(スポーツと宗教)
14	(オリンピックについて)
15	救急法

運動実践に関しては、オンデマンド教材として自作の運動法の紹介資料を提供したほか、ストレッチングの方法などのYoutube動画やWHO (Europe) による“Stay physically active during self-quarantine”⁵⁾のような各種団体が提供する運動方法などを各種紹介した。

授業への参加確認は、それぞれ提示した課題に対する学習成果（コメント）の提出を基本とし、コメント内容を評価の対象にした。運動実践に関する報告も一部求めたが、評価対象より外した。既述の通り、学生個人の健康状態が把握できないなかで運動を強いることに慎重であるべきと考えたうえ、この

方法では報告に信憑性に疑問が残る。また、居住環境によっては運動できないことも予想されたためである。

一方、学生間のコミュニケーションによるメンタルヘルスの向上も重要な目的の一つである。新入学生にとっては、友人・知人が皆無の場合も多く、新たな生活に戸惑うばかりであろう。通常の授業においても人的コミュニケーションを大事にしており、遠隔授業期間中における人的コミュニケーションを模索した。具体的には、通常の授業開始時刻30分後よりZoomミーティングを開設し、自由参加にて参加者を募った。開設当初は2割程度の参加者であったが、だんだんと増加し、第6回にはおよそ6割程度の参加者になった。授業時間中ではあるが、成績評価対象とは全くせず、学生の自主的参加ながらも多くの参加者があったことに意義を感じている。具体的には、各回、教員よりPCやZoomの操作方法についての質疑応答、大学生生活についてなど全体説明したのち、ブレイクアウト機能を利用して、4-5名程度のグループをランダムに作成し、基本的に自由な交流機会を提供した。15-20分間を2回行い、他の授業での疑問点の共有、英語学習の方法・出身地に関する情報交換、留学に対する思いなど、ときおりテーマを提示した。ホストとして巡回すると、基本的には自己紹介、他の授業についての疑問点や趣味などを話していたようである。対面授業開始後にこのことについて自由記述のアンケートを取ったが、受講者97名中61名の回答を得ることができ、47.5% (29名) の学生が毎回、19.7% (12名) の学生がほとんど参加したと回答した。参加した理由については、本来の授業時間中でもあり、「授業の一環だと思ったからとりあえず参加した」と答えた学生が66.7% (38名)、「参加して得られるものがあつた」、「楽しかった」と答えた学生が38.6% (22名) (重複回答可) であった。Zoomでのミーティングにおける会話内容については上述の通りの返答で

あった。得られたものは何かという問いに対しては、「連絡先の共有」、「交友関係の確立」、「授業に関する問題点の把握と解決」、「初めて会う人と話をする力」、対面授業開始後のスムーズな交流関係」という内容の回答がみられた。初回から6回の遠隔授業期間中であつたこともあり、学生生活の導入として有意義であつたと自負している。仮に長期化した際には、マンネリ化しない方策や、参加した学生としなかつた学生間での差をどのように解消するかなど検討すべき課題も浮かび上がるだろう。

4. 対面授業の導入

5月15日、大学協議会より、6月3日(第7週)以降、対面授業を一部認める通知があつた。これを受けて、外国語学部内で対面授業を導入する曜日と科目の選定が行われた。さまざまな議論・調整の末、1年生に限定し、火曜日2限の英語リーディング科目と3限の基礎演習、水曜日1限に開講される英語コミュニケーション科目と、3,4限に開講される「健康スポーツ科学」(本科目)が対面授業を導入することが決定された。

外国語学部で対面授業を導入するにあたり、入学後登校できていない1年生への配慮が重要視された。また、対面授業の有効性はもちろんのこと、授業時間の連続性も考慮された。当科目のシラバスではサブタイトルとして、「スポーツ活動によるコミュニケーション能力の向上」を掲げている。大学での導入教育として、身体活動を通じたお互いのコミュニケーション能力の向上と、そこで培われた人間関係の構築方法は入学後の学生生活をより有意義なものにしていると考えている。この観点から、当科目の対面授業実施に向けて、その可能性を模索した。

水曜日3,4限に開講される当科目は、学生にとって2限が空きコマとなることから、学生の学内における居場所を確認した。図書館、グローバルプラザが一部開放することとなり、また、学生食堂もオー

ブンすることが分かつた。このような情報を鑑み、学生にとっての空きコマ(実際にはオンデマンド授業で行われる「経済学」が開講)での滞在場所を見込むことができ、授業外での学生間交流の場も醸成できることとなった。

一方、当科目はおよそ100名の履修者を学籍番号が奇数の学生は3限、偶数の学生は4限にクラス指定して履修させている。担当教員は専任教員と非常勤講師の2名で運営している。通常であれば、2名の担当者により複数のクラス(スポーツ種目等の選択)に分割し開講している。感染のリスク回避のため、より注意深く学生を観察できるよう2名の教員により、1クラスを担当するようにした。また、運動不足が予想される学生の体力状況、感染リスク低減のため活動量を低減させた運動内容を考慮して、対面での授業時間を40分間とし、クラス内で学籍番号の前半と後半で二分割した。すなわち、およそ25名の受講生を2名の教員で指導する体制とした。

一方、偶数クラスの学生は1限終了後から4限の開始まで、毎週待たなければならない不公平感が想像される。そこで、上記の4グループの授業の順序を3,4限の中で順送りすることとし、スケジュール表をあらかじめ提示した。なお、後述の7月1日(第11週)以降の4回の授業は、両クラスの全受講者を学籍番号順に4分割し、同様に順送りする方法で新たな学生交流の場を醸成するよう配慮した。

学生が対面授業に参加するに際し、体調の自己チェックを各自行い報告させた。大学として、通学前の検温ならびに発熱等、風邪の症状がある場合は自宅での休養を学生に指示している。加えて、対面での実技授業参加に際し、風邪の症状、頭痛、呼吸感覚、味覚・嗅覚の異常、倦怠感など具体的な症例を質問項目として挙げるGoogle Formを作成し、授業開始時刻の30分前までに送信させた。健康チェック目的のほか、日常的な健康管理の重要性について認識させる教育的効果も期待した。一方、対面授業

の欠席は代替する課題の提出により不利益を被ることがないことを改めて提示したが、この期間中、そのような申し出と欠席は皆無であった。

対面授業の方法について次に示す。感染予防対策として、初回は更衣をせず簡便な運動に抑え、オーラルコミュニケーションを重視する内容とした。2回目以降、更衣室内のロッカーを間引きして使用するよう対応して頂き更衣時の密を避けた。また、体育館床面に2m置きにラインテープを細切れに張り(図1矢印)、密接予防と社会的距離の距離感を意識させた。また、体育館内には消毒用アルコールを5～8本設置し、適宜必要に応じて手指消毒をできるようにした。さらに、授業時間の合間に、学生が使用した用器具(ラケット、シャトル、卓球ボール)に次亜塩素酸水をスプレーし、ペーパータオルで拭き取る作業を教員が行った。



図1 スラックラインの実施状況

授業内容(教材)については、初回より2回を「スラックライン」とし、続く2回を「卓球」とした。その後、対面授業の幅が広がった第11回目以降の4回は「バドミントン」とした。「スラックライン」とは、幅5cmの布バンドを両端で固定し、平衡感覚と体幹筋力の向上を期待するほか、トランポリンのように飛び跳ねる競技として行われているスポーツの一種である。授業ではその簡易型のものを用いた(図1)。克服課題は、一般社団法人日本スラックライン連盟より発表されている「スラックライン基礎

技能」⁶⁾に基づいて提示した。

卓球に関しては、通常「マルチスタジオ」を利用しているが、密対策として、卓球台をすべて体育館(メインフロア)に移動し、片面を壁側に向けゆとりをもって配置した(図2)。また、8台中1台には卓球台の半面にサーブマシンを取り付け、機械的に球出して連続的に打ち返す練習場所を設定した(図3)。マシンを使用することにより、毎打球ともに同様の軌道と場所、リズムでレシーブすることができ、上達が早くなる。



図2 体育館における卓球台の配置

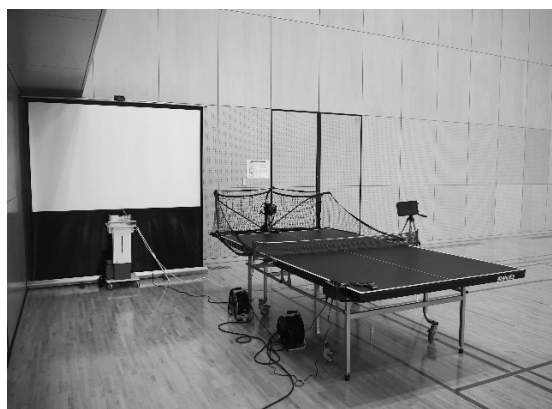


図3 iPadを使用したフォーム確認システム

さらに、この練習台の脇にiPadを設置し、iPadの遅延再生システムを利用しスクリーンに自身の打撃フォームを投影するシステムを構築した(図3)。これにより、自分自身のフォームを瞬時に把握でき、すぐに修正する練習が可能となる。マルチメディアの発達とともに自分自身の動きを客観的に即時に把

握できる練習方法の一つとして、取り入れられるようになってきている⁷⁾⁸⁾。

バドミントンについては、密接回避のためダブルスを回避し、シングルスでの基礎練習を中心とした。また、コートの有効利用のため、正規のコート間に臨時コートを創設するため、隣接コートの支柱間にネットを張り、プレーヤー間の密接をできる限り排除するよう工夫した (図4)。



図4 バドミントンコートの設営

なお、第15回目の最終回は、例年であれば心肺蘇生法・救急法の実習を行っているが、学生数3割の対面授業実施の原則のもと、同時限に開講される3年生の英語科目の対面授業実施のため、当科目をすべて遠隔授業とし、例年同様のテーマにて教材・課題を提示した。

このように対面授業が実施できたのは、安全性担保のため対面授業に参加する受講生を半数に削減し、教員が授業日前に卓球台の設置やコート設営を行い、実技授業の環境整備に注力できた結果と考えている。また、対面授業への参加時間を半分にしたため遠隔授業も継続して行い、課題学習を求めた。その準備と対応は相当の負担 (いわば倍増) ではあったが、毎週の対面授業時に遠隔授業の課題への取り組みに関して確認できたことは有意義であった。

5. まとめにかえて

このような取り組みは、このコロナ禍において決して最善であったとは考えていない。対面授業が可能となった6月、7月は、全国的に見ても報告される感染者数が減少した稀有な時期 (図5) であったと振り返ることができる。

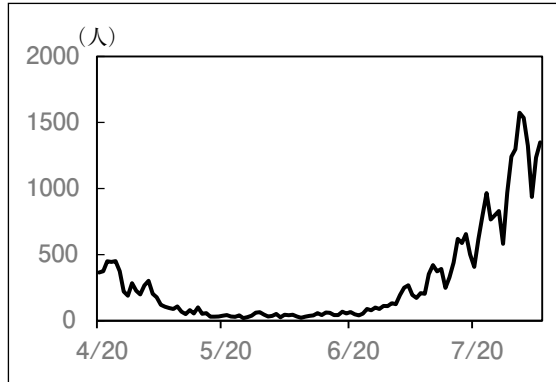


図5 新規感染者の推移 (厚生労働省発表オープンデータ⁹⁾より富岡作図)

新型コロナウイルス感染予防のために、三密回避のほか手指消毒が大切で、マスクの装着により飛沫の飛散防止が重要であることが叫ばれている。対面授業を実施するにあたり、授業時間内の対人接触を避けるよう注意喚起を重ねた。しかしながら、特に女子学生間において、スキンシップはお互いの親密感を高める自然なもので、授業時間内外でたびたび観察された。教師の立場で何度か指摘したが、彼女たちにとって習慣であり自然な振る舞いであることも自覚しており、学生自身それを自覚することが重要だと認識している。一方、手指消毒の徹底には十分に留意した。教場である体育館内には消毒用アルコールを複数個所におき、飲水休憩時の消毒を推奨した。また、共用したラケットやシャトルは授業時間の間に教員が消毒したほか、バドミントンコートや卓球台の設置は教員があらかじめ授業時間前に行い、共用物を介した感染をできる限り排除できるよう尽力した。

このような取り組みは、他の授業がオンデマンド形式を継続したため、教員自身が日常的なルーティ

ネットワークを自己裁量で時間設定できたため、準備に時間を費やすことができた結果であると考えている。一方、同キャンパス他学部の同授業がオンデマンド形式を継続したため、コート設営を毎回の授業で行う必要がなかったことも要因と考えられる。また、学生にとっての授業の連続性も功を奏した。すなわち、教員側の周到な準備に加え、対面授業を実施するために結果的に好条件が重なった結果であると考えられる。

前期終了後に行った任意回答のアンケート結果をみると、この科目で対面授業に参加できた結果、登校しての授業開始後、メンタルヘルスや大学での学生生活のスタートに好影響を及ぼしていることが推察できた。

以上のように感染予防と教育効果の追及に最善の努力をしたつもりではあるが、振り返ると改善点は見つかることであろう。このような緊急事態における取り組みを歴史に残し、以後、同様のことが起きた場合の参考になれば幸いである。

参考文献

- 1) WHO: “Pneumonia of unknown cause – China”
<https://www.who.int/csr/don/05-january-2020-pneumonia-of-unkown-cause-china/en/>
 (2020年10月1日確認)
- 2) 厚生労働省: 「新型コロナウイルスに関連した肺炎の患者の発生について (1例目)」
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_08906.html
 (2020年10月1日確認)
- 3) 橋口剛夫: 「第11回大学体育指導者養成研修会を終えて」 大学体育、社団法人大学体育連合、115巻、p.35. (2020)
- 4) 岡山大学プレスリリース: 「他大学等へ大学体育「岡大プログラム」教材の提供を開始 オンライン授業への活用を期待」

https://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id714.html

(2020年10月6日確認)

- 5) WHO Regional Office for Europe: “Stay physically active during self-quarantine”
<https://www.euro.who.int/en/health-topics/health-emergencies/coronavirus-covid-19/technical-guidance/stay-physically-active-during-self-quarantine> (2020年10月5日確認)
- 6) 日本スラックライン連盟: 「スラックライン基礎技能」 <http://jsfed.jp/img/2019basic.pdf>
 (2020年10月20日確認)
- 7) 村山光義、村松憲、佐々木玲子、清水静代、野口和行: 「動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果 —フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例—」 慶應義塾大学体育研究所紀要、46(1) pp.1-15 (2007)
- 8) 永井隆昌、穴戸英彦、亀田能成、北原格: 「動作学習のための映像情報を用いたオンライン視覚フィードバック方式」 情報処理学会研究報告、15巻 p 1-8. (2019)
- 9) 厚生労働省: 「新型コロナ感染症について (オープンデータ)」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/open-data.html>
 (2020年10月19日確認)

大学生へのアンケートからみえる英語教育の課題

山口 佐和子
名城大学非常勤講師

1. 研究の背景と目的

大学への進学率は53.3%となり、多くの若者が大学への扉を開くようになった（文部科学省、2018b）。また、入試制度の多様化により、英語を入試科目として勉強するという機会を持たなかった学生も増えている。

こういったバックグラウンドを持つ学生たちに英語を教えるなかで、一方的な教員の思い込みで授業を行うのではなく、学生たちの視点に立って、授業を見直す必要があるのではないかという認識に至った¹⁾。

本研究では、学生の英語に対するさまざまな経験・思い・考えを探った上で、学生にとって英語そのものはどのように位置づけられているのか、また英語を学習する当事者としてどのような授業を望んでいるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

2019年4月第1回目の授業の最後に、学生にアンケート用紙を配布した。以下のことを学生に伝えたのち、アンケート調査を開始した。

- ・本アンケートは、今後の英語の授業に役立たせるために行うことを目的としていること
- ・倫理的配慮に基づき、入手した情報は、厳密に管理し、上記目的以外には使用しないこと
- ・アンケート調査に参加するかどうかは自由であること
- ・アンケート項目のなかで、回答したくない、あるいは回答しづらいと感じたものに対して回答する

必要はないこと

このようなアンケート実施手続きを取った結果、1年生から4年生の150名の大学生から回答を得ることができた。

3. 調査内容と分析方法

調査項目は以下のとおりである。

- ①学部
- ②何年生
- ③英語検定試験の受験経験の有無
- ④上記のこれまでの最高級位
- ⑤最高級位を取った時の年齢
- ⑥TOEIC受験経験の有無
- ⑦上記のこれまでの最高得点
- ⑧上記以外の英語試験の受験経験の有無
- ⑨上記以外の受験した英語試験の名称
- ⑩上記の最高級位あるいは最高得点
- ⑪海外渡航の有無
- ⑫ひとりでの海外渡航経験の有無
- ⑬行ったことのある国（複数回答）
- ⑭海外旅行で楽しかった思い出（自由記述）
- ⑮海外旅行で困った思い出（自由記述）
- ⑯語学研修・留学経験の有無
- ⑰上記の期間
- ⑱語学研修・留学で楽しかった思い出（自由記述）
- ⑲語学研修・留学で困った思い出（自由記述）
- ⑳英語は好きか（5段階評価）
- ㉑自分の英語力（5段階評価）
- ㉒英語は将来役立つか（5段階評価）
- ㉓英語を嫌いになった時期と理由（自由記述）
- ㉔英語を授業で学ぶアイデア（自由記述）

分析方法としては、質問項目⑭、⑮、⑰、⑱、㉓、㉔については、Krippendorffによるメッセージ分析法を一部参考に回答をコーディングしカテゴリー抽出を試み、質問項目⑳に関しては「はい、まあまあ、どちらともいえない、どちらかという嫌い、嫌い」、㉑に関しては「できる、まあまあ、ふつう、どちらかという苦手、苦手」㉒に関しては「はい、まあまあ、どちらともいえない、どちらかというと思わない、思わない」の5段階評価を用い、クロス集計を試みた。他の質問項目に関しても、関係性を明らかにするために、部分的にクロス集計を試みた。

4. 調査結果

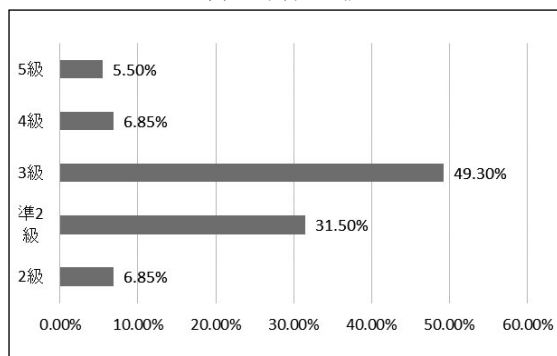
調査対象者の属性としては、質問項目①の学部別に見た場合、人間科学部：42名（28.0%）、国際情報学部：41名（27.3%）、経営学部：25名（16.7%）、現代社会学部：22名（24.7%）、スポーツ科学部：15名（10.0%）、工学部：5名（3.3%）であった。

質問項目②の学年別にみた場合は、1年生：51名（34.0%）、2年生：96名（64.0%）、3年生：1名（0.7%）、4年生：2名（1.3%）であった。

質問項目③の英検を受けたかどうかについては、82名（54.7%）が受けており、68名（45.3%）が受けたことがなかった。

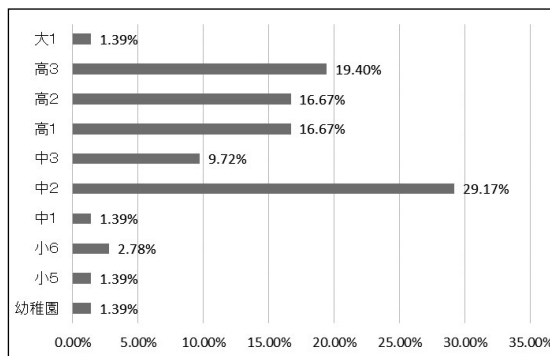
質問項目④に関する有効回答数73件の内訳は以下のとおりである。

図1 取得した級



質問項目⑤に対する72件の有効回答があった。

図2 取得時の学年



質問項目⑥については、回答欄に記入のあった148名の内、TOEICを受験したことがある者が15名（10.1%）で、受験したことがない者が133名（89.9%）であった。

質問項目⑦のTOEIC獲得点数においては、回答のあった13名の平均点は430点であり、280点から650点のばらつきがみられた。

質問項目⑧で、英語検定試験とTOEIC以外の試験を受けたことがあるか尋ねたが、回答のあった146名の内、受けたことがあると回答した者が22名（15.1%）で、受けたことがないと回答した者が124名（84.9%）であった。

英語検定試験とTOEIC以外の英語資格試験を受けた者は、CASEC、GTEC、TOEFL、全商実務英語検定を受けていた（質問項目⑨）。

質問項目⑩で、上記の級・得点を尋ねた。有効な回答のあった14名の回答をみると、CASECが平均点392点で、点数の範囲は244点から452点であった。全商実務英語検定は1級、2級取得者がそれぞれ1名ずつであった。

質問項目⑪では、海外に行ったことがあると回答した者が85名（56.7%）、行ったことがないと回答した者が65名（43.3%）であった。

ひとりで海外に行った者は4名（2.7%）、行ったことがない者は146名（97.3%）であった（質問項目⑫）。海外へ行った者の内、5%がひとりで海外に

行った経験を持っている。

質問項目⑬では85名から有効回答を得た。

表1 学生が訪れた国と地域（複数回答）

順位	国・地域	人数	%
1	韓国	36名	42.4%
2	ハワイ	23名	27.1%
3	グアム	21名	24.7%
4	台湾	19名	22.4%
5	アメリカ本土	16名	18.8%
6	シンガポール	11名	12.9%
7	カンボジア	10名	11.8%
8	ニュージーランド	9名	10.6%
9	カナダ、香港	7名	8.2%
10	オーストラリア、マレーシア	6名	7.1%
11	タイ、中国	5名	5.9%
12	イタリア	4名	4.7%
13	イギリス、サイパン、フィリピン、ベトナム	3名	3.5%
14	ドイツ、フランス、パリ	2名	2.4%
15	インドネシア、スイス、スリランカ、ブルネイ、メキシコ	1名	1.2%

質問項目⑭では、82名が自由に記述した旅行中楽しかった事柄136件をコーディングし、7つのカテゴリーを抽出し、それぞれの件数も記した。

表2 旅行中楽しかったことの構成要素

順位	カテゴリー	件数
1	観光（景色、観光地、スポーツ試合）	40件
2	食事	25件
3	買い物	21件
3	人とのやりとり （現地の人との出会い、友達との思い出、ホームステイでの思い出）	21件
4	アクティビティ （フラダンス、海に入って魚に餌をやるといった現地特有の新たな体験）	18件
5	学び（文化、歴史）	6件
6	英語活用・コミュニケーション （ジェスチャーのみ、単語のみ、喋れなかった、習いたての英語で注文、ちょっとした英語が伝わった）	5件

質問項目⑮旅行中に困ったことについては、75名が記述した95件の事柄をコーディングし、7つのカテゴリーを抽出し、各々の件数も記した。

表3 旅行中困ったことの構成要素

順位	カテゴリー	件数
1	英語活用・言語活用	40件
2	突発事故 （犯罪、迷子、クレジットカードのトラブル、免税品購入のトラブル）	11件
3	交通機関利用 （バス、電車、地下鉄、タクシー）	10件
3	異文化（チップ、お金の数え方）	10件
4	食事	9件
5	病気・災害	8件
6	インフラ不整備（wifi、道路、トイレ）	7件

質問項目⑯の語学研修・留学経験の有無では、144名が回答し、その内経験のある者が41名（28.5%）、ない者が103名（71.5%）であった。

上記の期間を尋ねたところ（質問項目⑰）、2週間以内が30名（73.2%）、1か月以内が10名（24.4%）、1年が1名（2.4%）であった。

質問項目⑱では語学研修・留学中の楽しかったことについて37名が自由記述した事柄54件をコーディングし、5つのカテゴリーを抽出し、それぞれの件数も記した。

表4 語学研修・留学中楽しかったことの構成要素

順位	カテゴリー	件数
1	人とのやりとり （現地の人との出会い、ホームステイの思い出）	27件
2	英語活用 （現地の人と英語で会話ができた、色々な国のクラスメイトと話せた、ホストファミリーとお互いの国について話せた）	10件
3	食事	9件
4	アクティビティ（散策、遊び）	5件
5	学び（文化、研修）	3件

質問項目⑱では、語学研修・留学中に困った点について34名から得られた38件の事柄をコーディングし、8つのカテゴリーを抽出し、件数も記した。

表5 語学研修・留学中困ったことの構成要素

順位	カテゴリー	件数
1	英語活用	19件
2	突発事故(迷子、ストライキ、野宿)	6件
3	インフラ不整備(トイレ、不衛生な生活空間)	4件
4	食事	3件
5	交通機関利用	2件
5	病気・精神の不調	2件
6	異文化	1件
6	人とのやりとり	1件

質問項目⑳英語が好きか、質問項目㉑英語は得意か、質問項目㉒英語はあなたの将来に役立つと思うかについての回答者は148名であった。各回答の割合は以下の図のとおりである。

図3 英語は好きかという問いに対する回答

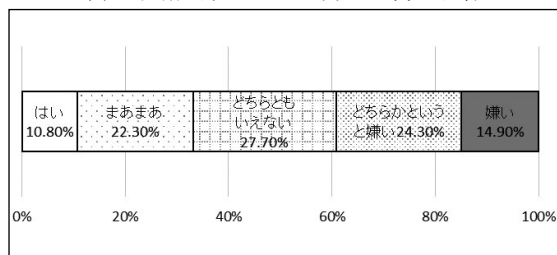


図4 英語は得意かという問いに対する回答

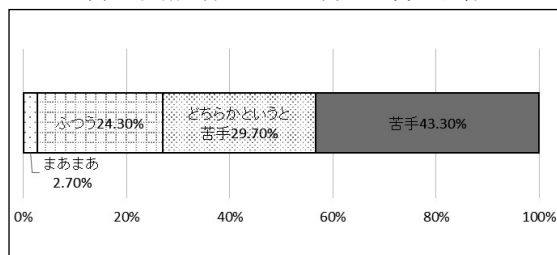
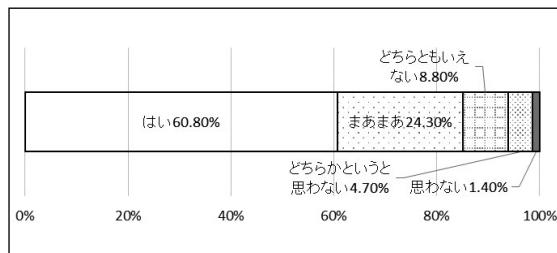
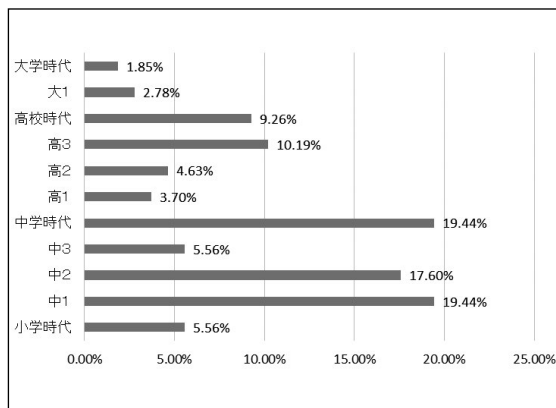


図5 英語は将来役立つかという問いに対する回答



質問項目㉓の英語を嫌いになった時期については、108名の回答があった。学年の記載がなく、「中学時代」、「高校時代」と記載があったものは、そのままグラフ化している。

図6 英語を嫌いになった学年または教育機関



質問項目㉓で、英語を嫌いになった理由も尋ねた。103名の回答から116件の事柄をコーディングし、6つのカテゴリーを抽出し、各々件数も記した。

表6 英語を嫌いになった理由の構成要素

順位	カテゴリー	件数
1	試験・成績の悪さ	41件
2	苦手な英語スキルの存在(文法、長文読解、発音、単語、イディオム、スピーチ、リスニング、会話)	30件
3	授業への不満—運営・内容・環境(速い進度、クラス分け、プレゼン、クラスレベルの高さ)	19件
4	自己責任・苦い経験	14件
5	教員への不満	6件
5	諦観(わからないから、何も理解できない)	6件

質問項目④の英語を学ぶアイデアについては75名の回答から94件の事柄をコーディングし、4つのカテゴリーを抽出し、各々件数も記した。

表7 英語を学ぶアイデア

順位	カテゴリー	サブカテゴリー	件数
1	教材	映画	6件
		洋楽	6件
		アニメ	4件
		興味のある分野	4件
		ゲーム	4件
		ドラマ	2件
	画像	1件	
	(合計)		27件
2	教育方法	グループワーク	13件
		海外経験・ネイティブスピーカーとの会話	9件
		身体をつかう	2件
	(合計)		24件
3	支援環境	ストレス軽減	6件
		楽しさ・明るさ	6件
		理解・成長の喜び	6件
		励まし	5件
		英語に対する認知転換(勉強→外国語の習得)	1件
	(合計)		24件
4	学習したいスキル	会話	8件
		単語	4件
		基礎事項	3件
		読解	1件
		ライティング	1件
		文法	1件
		発音	1件
		(合計)	

5. 考察

(1) みえてくる学生像

本調査対象者は、学年や学部には偏りはあるものの、英語能力としては英検3級以下程度が6割を占め、そのことは、文部科学省の全国データと同一であることから、日本における平均的的大学生と捉えてよい(文部科学省, 2017)²⁾。

学生の6割が英検を受け、その3割は中学2年生で受験している。他の資格試験には消極的だ。海外には6割の学生が、欧米・アジア圏27の国や地域を訪れており、韓国、ハワイ、グアム、台湾、アメリカ本土に行った者が多い。

旅行で海外を訪れた時の楽しい思い出は、観光と食事と買い物で、英語に関しては、ジェスチャーのみ、あるいは単語のみで、何とかやりとりできた程度である。一方、旅行中困ったことは、英語ができなかったことがトップで、そのことが突発事故や交通機関利用のトラブルに直結している。

語学研修・留学では旅行の時とは様変わりし、楽しかった思い出が、人とのやりとり、英語の活用、食事が上位に来る。英語で会話ができ、話せたという経験が多い。しかし7割以上は2週間以内の期間であり、言語習得論基準の半年に及ばないためか、一番困ったことは、英語についてである。

(2) 学生の英語に対する思い

英語は好きかという質問に対して、39.2%の学生は「嫌い」、「どちらかという嫌い」であると答えている。文部科学省調査の中で「英語学習は好きか」という問いに対して「嫌い」と回答したパーセンテージが52.0%(文部科学省, 2018a)、安藤・長谷川による特定の大学生に行った同様の質問に対するパーセンテージが60.7%である(安藤・長谷川, 2019)ことから考えると、若干低い、それは「学習」という文字がなかったことが関係している可能性もある。しかし4割いることは看過できない。

以下は、「英語が好きか」、「英語は得意か」、「英

語は将来自分の人生に役立つと思うか」をそれぞれクロス集計した表である。

表8 「英語が好きか」「英語は得意か」のクロス集計 (カッコ内は人数)

	苦手	どちらか という 苦手	ふつう	まあまあ	できる
嫌い	13.5% (20)	1.4% (2)	0% (0)	0% (0)	0% (0)
どちらか という 嫌い	16.2% (24)	7.4% (11)	0.7% (1)	0% (0)	0% (0)
どちらと もいえ ない	8.8% (13)	12.2% (18)	5.4% (8)	1.4% (2)	0% (0)
まあまあ	3.4% (5)	7.4% (11)	10.8% (16)	0.7% (1)	0% (0)
はい	1.4% (2)	1.4% (2)	7.4% (11)	0.7% (1)	0% (0)

表9 「英語は好きか」「英語は将来役立つか」のクロス集計 (カッコ内は人数)

	思わない	どちらか という 思わない	どちらと もいえ ない	まあまあ	はい
嫌い	0% (0)	2.0% (3)	1.4% (2)	4.7% (7)	6.8% (10)
どちらか という 嫌い	0% (0)	1.4% (2)	3.4% (5)	7.4% (11)	12.2% (18)
どちらと もいえ ない	1.4% (2)	1.4% (2)	4.1% (6)	6.8% (10)	14.2% (21)
まあまあ	0% (0)	0% (0)	0% (0)	4.7% (7)	17.6% (26)
はい	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0.7% (1)	10.1% (15)

表10 「英語は得意か」「英語は将来役立つか」のクロス集計 (カッコ内は人数)

	思わない	どちらか という 思わない	どちらと もいえ ない	まあまあ	はい
苦手	0% (0)	1.4% (2)	6.1% (9)	13.5% (20)	22.3% (33)
どちらか という 苦手	0% (0)	3.4% (5)	2.0% (3)	5.4% (8)	18.9% (28)
ふつう	1.4% (2)	0% (0)	0% (0)	4.7% (7)	18.2% (27)
まあまあ	0% (0)	0% (0)	0.7% (1)	0.7% (1)	1.4% (2)
できる	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)	0% (0)

クロス表の分析から、学生は、英語が「どちらかという嫌い」あるいは「嫌い」でしかも「苦手」と思っている者が多いことがわかる。また、右の円

グラフが示すとおり、英語が「嫌い」あるいは「どちらかという嫌い」にもかかわらず、「英語は将来役立つ」と自分の人生の中に英語を位置づけている学生がおよそ8割いる。英語が「苦手」あるいは「どちらかという苦手」という学生も8割以上がそのように英語を位置づけている。

図6 英語が「嫌い」「どちらかという嫌い」な学生の英語への思い

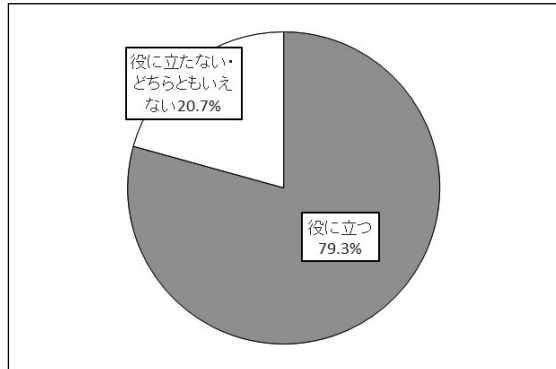
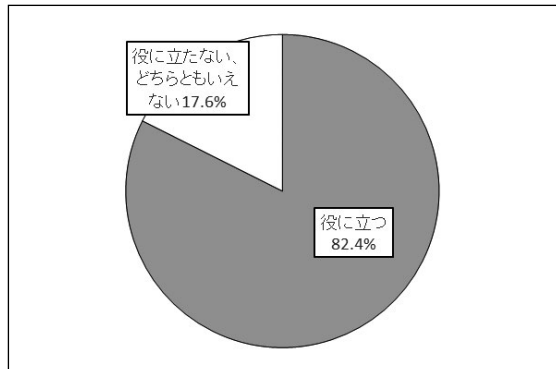


図7 英語が「苦手」「どちらかという苦手」な学生の英語への思い



英語が「嫌い」・「どちらかという嫌い」な学生が英語を嫌いになった時期は、小学時代：6.1%、中1：28.6%、中2：26.5%、中3：8.2%、中学時代：16.3%で合計85.7%となり、英語が「苦手」あるいは「どちらかという苦手」な学生が英語を嫌いになった時期は、小学時代：5.5%、中1：22.0%、中2：20.9%、中3：5.5%、中学時代：22.0%で合計75.9%となる。英語が嫌い、あるいは、英語は点が取れない、できないと苦手意識を持ったのは中学生以下であった者がおよそ8割いることになる。

つまり学生にとって、英語は認識のねじれ現象

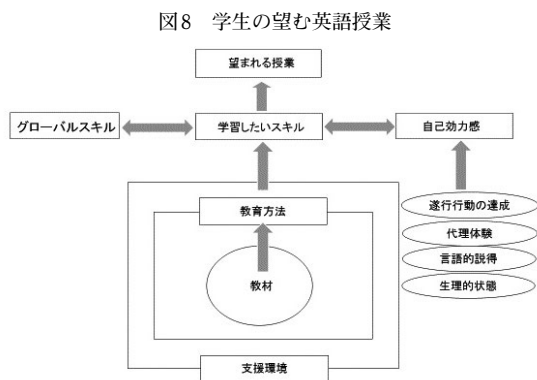
(将来役に立つのに、自分は嫌い・苦手でできない)を起こしており、しかもその嫌い・苦手できないという意識を6~7年間抱えている。鈴木(2019)は、「英語の勉強は体中に針を刺すことだ」と英語学習に伴う苦痛を表現する学生が多いことを調査から明らかにしているが、それは本調査でも見ることができた。

(3) 学生の望む英語の授業

上記のような傾向を持つ学生が決して少なくない状況を踏まえつつ、教員はどのような授業を構成する必要があるのだろうか。

学生の望む授業を、学生の自由記述と英語を嫌いになった理由および海外渡航経験から考察し、まとめたのが図8である。

図8左側のグローバルスキルとは海外渡航を安全に経験するためのスキルである。具体的には、突発事故、病気や災害、交通機関利用、異文化・食事、インフラ不整備にどのように英語対応するかというスキルである。海外渡航経験のある学生の内72.9%は、英語が苦手・どちらかという苦手と答えており、また32.9%は英語が嫌い・どちらかという嫌いだと答えていることから、英語学習が海外体験と乖離しており、そこを近づける必要があると思われる。



学生は各々英語を嫌いになった理由を持っている。自己効力感を上げて、学生のビリーフ(学習経験などにより作り上げられた学習者もつ考え方=英語に対する自己概念)を変える授業づくりも必要

だ。学生のビリーフは、学生の自信に影響を及ぼし、行動を制約する。英語学習に対する消極的な構えにもつながりうる(鈴木, 2019; 和田, 2019)。図右は、Bandura(1977)による自己効力感を育む4つの基礎(遂行行動の達成・代理体験・言語的説得・生理的状態)の必要性を明示している。松沼(2006)は、その概念を以下の表11の定義に見られるように英語学習に適用した。本調査の結果(表6参照)に対応すべき工夫点は上記4つの基礎に分類できる。

表11 自己効力感の4つの基礎の定義と工夫内容

4つの基礎	定義	工夫すべき点
遂行行動の達成	授業・テストで成績をフィードバックされることによる達成感	理解度を基準にした成績評価、苦手スキル克服、進歩よりも理解度重視
代理体験	他学習者を観察	先輩などのロールモデル提供による試験合格モチベーションの促進
言語的説得	教師の言葉による説得	教員の学生への歩み寄り、学生の不満の解消
生理的状態	授業・テスト中の生理反応	安心できる授業運営・内容・環境の提供、諦観、自己責任、苦い経験の払拭

学生の英語を学ぶアイデア(表7参照)を図式化したのが図中央である。ストレスの少ない、楽しく明るい、そして理解や成長の喜びが感じられ、励ましのある支援環境の中で、英語は勉強でなく語学を身につけるといった認知転換のもとでの学習を望んでいる。城一・鈴木(2019)も、大学生の英語教育に関する調査から、英語多読を勉強という意識的学習と捉えず、無意識的学習に近い英語体験と捉えることが「できる感」を拡張すると結論づけている。

教材は、映画、洋楽、学生の興味のある分野等が望まれている。映画は使用されている単語や表現の学習のみならず、感想を書くというライティング作業、映画評を読むというリーディング作業、ディス

カッションというリスニング・スピーキング作業といった拡大学習が可能であろう。洋楽も単語や表現の学習のみならず、ディクテーションやシャドウイング、歌詞分析、押韻の学習、音韻論、アーティストのライフヒストリーまで学習を広げることが可能だ。学生の興味のある分野について授業最初に情報を集めることも考えられる。自分が選択したことが最も長くモチベーションを維持できると言われているからだ (Ushioda, 2011)。それらを教える方法として、グループワークや海外渡航やネイティブスピーカーとのコミュニケーションや身体を動かすことが挙げられている。グループワークは、Ozaki (2017) が、Oxford (1990) によって発表された言語学習戦略項目を改良したものにも「誰かと一緒に英語の勉強をすること」として入っている。また、Nuttall (1996) は、外国語学習に最も良い方法はその言語を話す人たちの中で暮らすことであり、次はその言語でたくさん読むことだとも述べている。

これら支援環境・教材・教育方法をもって、学生が学びたいと思っている会話力、単語力、読解力、ライティング力、文法力、正しい発音といったスキルを身に付けることができるように、教員が授業づくりに工夫を凝らすことは、教員が学生に一步步み寄ることになる。安藤・長谷川 (2019) は、英語教育における大学生の調査の中で、楽な勉強法だから選んでいるのではないかと思われるふしがあるという。しかし、同時に、学習スタイルに合った授業が必ずしも良い授業とは言えないが、少なくとも、不適合感を持たせない方が好感度を上げ、効力感を持つためには良いと結論づけている。

6. 結論

学生たちは英語に対して嫌いであったり苦手であるという意識を中学時代から長く引きずる者が多い。それにもかかわらず、自分の将来の人生に役立つと感じている。その不調和を理解して、授業に臨

むことが肝要である。学生たちの英語学習に対するアイデアはこれまで英語教育研究者によって提唱されてきた事柄も多く、看過することはできない。海外渡航する学生のニーズに沿った授業づくりや、英語嫌いになった要因を解きほぐす自己効力感を高める授業づくりにも目配りしていく必要がある。

注

- 1) 三國と小野 (2019: 62-63) は、学部生の視点を英語の授業に取り入れる必要性がある理由として、①大学教育の大衆化と企業のグローバル化、②大学の教育情報公開の項目に「学生の満足度」に近い将来入れられ、大学運営に影響をおよぼすようになること、③IR (Institutional Research) として教育運営改善の意味をもつこと、を挙げている。筆者は、社会学および社会福祉学の領域で「当事者主義」が重要な概念であることに着目して本調査を実施した。
- 2) 本概要は高校生を対象にしているが高卒後すぐに大学入学した者の英語力と捉えることができる。

参考文献・資料

- 安藤則夫, 長谷川修治 (2019). 「英語教育における学習スタイルと適合性」『植草学園大学研究紀要』11, 17-28
- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, Vol.84, No. 2, 191-215
- 城一道子・鈴木哲平 (2019). 「大学基礎教養英語教育の試み」『教育総合研究: 江戸川大学教職課程センター紀要』5・6, 1-14
- Krippendorff, K (1980). 三上俊治, 椎野信雄, 橋本良明訳 (1999). 『メッセージ分析の技法』勁草書房
- 松沼光奏 (2006). 「自己効力感尺度 (ESE) の作成」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』14 (1), 89-97

- 三國信夫, 小野正人 (2019). 「経営学部生の英語意識と教育改善に関する考察」『城西大学教職課程センター紀要』3, 61-74
- 文部科学省 (2018a). 「平成29年度英語力調査 (高校3年生) の概要」(2020/04/08 閲覧)
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf
- 文部科学省 (2018b). 「平成30年度学校基本調査 (確定値) の公表について」(2020/04/08 閲覧)
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/
- 文部科学省 (2019). 「平成30年度英語教育実施状況調査概要」(2020/04/08 閲覧)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2019/04/17/1415043_01_1.pdf
- Nuttal C. (1996). *Teaching Reading Skills in a Foreign Language*. Oxford; Macmillan Publishers Oxford, R.L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York; Newbury House
- Ozaki, H. (2017). The process and results of revising SILL (ESL/EFL) Japanese Version. *JACET 56th International Convention (2017, Tokyo) Book*, 121
- 鈴木栄 (2019). 「外国語学習は何を目指すのか」『東京女子大学紀要論集』69 (2), 59-84
- Ushioda, E. (2011). Motivation learners to speak as themselves. In G. Murray, X. Gao and T. Lamb (eds) *Identity, Motivation and Autonomy in Language Learning*, 11-24. Bristol; Multilingual Matters
- 和田珠美 (2019). 「大学入学時における英語力と英語自己効力感とその後の学習効果と効力感に及ぼす影響」『中部地区英語教育学会紀要』48 (0), 81-88

真に豊かな人生と社会のために II

法学部「倫理学」の遠隔授業を中心にして

星 揚一郎
名城大学非常勤講師

1. はじめに

人間にとって真に大切なもの・ことはいったい何なのか。2020年の初頭から蔓延しはじめた新型コロナウイルス（COVID-19）の影響により、わたしたちの価値観は大きく問い直されることになった。それと並行して、シラバスを書いたときには想像もしなかったことであるが、急遽、大学の授業も遠隔授業で行われることになった。

本来ならば、授業がすでに始まっているはずの4月16日（木）の午後、法学部のオンライン授業の講習会が大学で行われた。名城大学の遠隔授業システムWebClassの利用方法の説明と、遠隔授業にすぐに対応できない学生に対する配慮の要請が、その内容の中心で、前日までに受講を申し込み、S棟1階の教室以外は立ち入り禁止という厳戒態勢だった。前日に「講師室のメールボックスをチェックしてもいいですか」と安易に問い合わせたところ、何人もの方から立て続けに連絡をいただくことになってしまい、あわてて撤回した。感染者が出た場合に、保健所に説明する必要があるからとのことだった。

高校までと異なり、大学では学生一人ひとりの受講科目が異なる。教科書がある教科も、ない教科もある。学内のちくさ正文館書店のみなさんは、学生の人数分の段ボール箱を用意することからスタートし、各学生のテキストをセットしてから発送するという初めての難作業に戦々恐々としておられた。全

局的に、学生に教科書の送料を負担させた大学が多かったようだが、名城大学は大学が送料を負担した。

2019年度の名城大学教育年報第13号では「真に豊かな人生と社会のために」と題して理工学部的人文科学系授業の実践報告をした⁽¹⁾。今回は、その第二弾として、法学部の「倫理学」の授業を中心に、遠隔授業の体験について残しておきたい。倫理学とは、実践哲学とも換言することができる価値を扱う学問である。

2. ガイダンス

それまでも運用されていたらしいが、WebClassを開いたことすらなく、学生だけでなく、教員であるわたしもプラグマティックに対処していくこととなった。学生の不安を軽減するために、なるべく早く、何らかのメッセージを伝えるべきだと思い、4月19日の夜、「ガイダンス」と題する資料を作成し、WebClassにアップしようとした。しかし、何かひとつ手順が違うようで、アップできない。真夜中に、理工学部の中村栄造先生にメールで問い合わせ、「夜中に、電話でもいいから質問して」と返信をいただき、日付が変わったところに、電話で問い合わせることなく奇跡的に掲載できたのが次の内容だった。

初めまして。(略) 本来ならば、キャンパスで、

皆さんに直接お目にかかって挨拶をするところですが、残念ながら、今年は、それが叶いません。

お会いできるときまで、こうしてオンラインで一緒に勉強してまいりましょう。

今年度のテーマは「やさしく」です。家のなかについて画面に向かってしていると、しげんと心が荒(すき)んできます。いろいろな心配事を背負っているひともいるでしょう。そうでなくても、せっかく楽しみにしていた勉強も、ひとりではつまらなくなってくるかもしれません。初心を忘れることなく、穏やかな気持ちで、最後まで楽しくやりましょう。

いまは力を蓄えるときです。コロナ禍が去ったら突っ走ることができるように、専門の勉強のほかに、本を読んだり、語学を勉強したりして、基礎となる力を培っておきましょう。人生のなかで、こうした時間はこれから何度もありません。貴重な一年間になりそうです。皆さんのサポートを全力でいたします。一年間、どうぞよろしく願い申し上げます。

山崎川の満開の桜の写真とともに送ったこのメッセージが学生にどのように伝わったのかは分からない。ただ、事実として、1年生から4年生まで200名を超える学生が、前期、水曜日2限の「倫理学1」に受講登録してくれた。

「講習会」では、ZoomやYouTubeの利用についても触れられたが、プライベートでも発信する側として使ったことがない。そこで、リアルタイムでのオンライン授業はさしあたり断念せざるをえず、オンデマンド型を選択し、次のようにガイダンス資料に書いた。

○課題の提出について 授業の前日までに資料をWebClass上に掲載しますので、1週間以内

に課題をこなしてください。あっているとか、まちがっているとかはないのです。受講人数が、もし、多ければ、皆さんの回答すべてにお応えするのは難しいことですが、なるべく、皆さんの回答をふまえて、授業を進めてまいります。

テキストは、コロナ以前に作成したシラバスに書いた柘植尚則『プレップ倫理学』弘文堂(2018年)をそのまま指定した。社会科学系に強い出版社から出たバランスの良いテキストだ。12章から成り、「倫理学とは」というイントロダクションに続いて、「幸福」「義務」「徳」という規範倫理の項目が続き、「道徳判断」「道徳」といったメタ倫理学の議論、「自己と他者」(他者論)、「個人と社会」(社会哲学)、「正義、自由、平等」(正義か善かという、自由主義と共同体主義との対立)、応用倫理(「医療」「環境」「ビジネス」と展開していく。持っていてよい一冊だ。

ただ、このテキストが、すぐには全員に行き渡らないことは容易に想像できたので、5月いっぱい、第6回目の講義までは、倫理学の基本について、毎週A4で5枚程度の資料を作って対応した。神話的な世界観から自然哲学へ、最初のフィロソファ(愛知者)ソクラテスによる倫理学の誕生、ソクラテスが「どこに向かって生きていけばいいか分からない」と発した問いに対するプラトンの答え(イデア論)とアリストテレスの反論までが、その内容だった。

コロナ禍で、外出もままならない状況での突然の遠隔授業なので、アテネオリンピックよりも前に行ったデルフォイのアポロン神殿などの写真を毎回添えて、学生の、コロナ後の自由な研究や移動に繋がるように意識した。『人間の学としての倫理学』の著者である和辻哲郎が『風土』を書いたことから分かるように、思想と風土は大いに関係がある。また、それは、「本当に生の教員が講義をしているのだろうか」という全国の大学生に共通する不信感

を払拭させるためでもある。わたしにしか話せない内容だ。



(写真) デルフォイのアポロン神殿(右)と「世界のへそ」(左)。2000年3月、筆者撮影。

毎回のように、「テキストは入手できたでしょうか」と学生に確認をしていたが、それでも、なかなか揃わなかった。それは、「テキストを手に入れずに済ませられる」と安易に考えた学生が多かったことによる。また、3・4年生の教科書リストに、この教科書が掲載されていなかったことも影響したようだ。この点については、次年度以降、改善していただくように依頼した。ただ、シラバスにはテキストは明記されているわけで、書店の責任では断じてない。6月初めの第7回目の授業からは、テキストの内容に繋げていった。

学生の通信環境の不備も遠隔授業を難しくさせた。そうした学生には、通信各社が特別に学生だけに無償で提供しているサービス内容や、大学がPCの貸し出しをしていることを授業でも繰り返し伝えた。自宅のwifiが安定しない学生には、ケーブルで接続すれば解決するだろうと指導した。

課題についても、初めは、誰もが答えられるようなものを課して、期限もゆるくした。たとえば、初回は、植松努さんの「思うは招く」という講演をYouTubeで見てもらい、自由に感想を書いてもらった。できない理由を考えるよりも、「だったらこうしてみたら」と前向きにチャレンジしていこうという内容で、困難なかで大学生活を送る学生への

エールのようなつもりで課した。これは、学生がワープロソフトで作成した課題をWebClass上で提出する機能に慣れるということも兼ねていた。

そのほか、個々に抱える不安に対応するために、次のような項目を初回の「ガイダンス」に含めた。

- 質問について 質問があれば、WebClass上の掲示板ではなく、個別にメッセージをください。できるだけ翌週の授業で解説します。誰が質問したかは基本的に公表しません（万一、公表したほうが受講生全体にとって興味深いアイデアであるときには、事前に了解を得ます）。
- 双方向性 文科省からは、教員と学生、学生同士の双方向性を確保するように指示されています。教員と学生に関しては、上記のように質問にできるだけ答えるという方法で十分かと思っています。他方、学生同士ですが、wiki を利用しようと考えています（後日、説明します）。
- サポート 何か困ったことがありましたら、配慮します。差しさわりのない範囲で相談してください。登録してくださった方が、きちんと勉強でき、力をつけ、単位がとれるようにサポートいたします。

双方向性については、上記のように、WebClassのwikiを利用して、基本概念を受講生の投稿によって整理していこうと考えていた。しかし、実際のところ、wikiについてのマニュアルがないだけでなく、情報センターや学務センターに問い合わせても使い方についての有効な答えが得られず、使用できなかった。

他方、WebClassの掲示板では、学籍番号や名前、発言内容が200人に伝わってしまう。大学からは、氏名と学籍番号など、二つ以上の個人情報結びつくとプライバシーの点で良くないと指摘された。したがって、学籍番号が自動的に記載されてしまうの

で、掲示板には氏名を書かないように指導した。このように、プライバシーに配慮すると、実質的にはメッセージを学生と個別にやりとりするしかなかったわけだが、質問には十分に答えることができたし、その内容を全体に還元することによって、間接的に双方向性は確保できた。

3. 「倫理学」の目標

さて、なぜ、法学部の学生が、選択科目とはいえ「倫理学」を学ぶべきなのだろうか。初回にガイダンスで説明したのは、次のとおりである。

1、価値について考えます。いま、世界がたいへんな状況に陥っています。豚コレラにも、鳥インフルエンザにも、非常に厳しい対応を見せる人々が、新型コロナウイルスに対しては甘く考えていたように思われてなりません。何を、どういう理由で優先させるか。政策、経済、医療、技術といった実践の背後には、価値観をめぐる考察が隠れています。

2、哲学します。倫理学(=実践哲学)の元にあるのは哲学です。哲学の基礎知識を一通り身に着けつつ、それを、現実の社会に突き付けて、ひとりひとりの頭を使って考察してまいりましょう。

3、本を読み、議論する力をつけます。テキストを熟読することにともない、大学生にふさわしい日本語力も、論理力もつきます。コロナ後にリーダーとなって世界を変えていく皆さんには、こうした力が必要なのです。

この目的のために、90分の講義を授業で聴いて、予習・復習といった自習をする計120分から150分の内容の資料と課題を毎回提示した。おそらく学生は、たいへんだったにちがいない。

最終的には、こうした目標が達成できたかどうか

を評価することになる。遠隔授業に切り替わり、評価についてだけ、シラバスを書き換え、学生には初回に次のように伝えた。

○評価 事前に、シラバスには、70パーセントが「期末レポート」、残りの30パーセントは「提出物」で評価すると書きました。しかしながら、前期は試験ができませんので、毎回の課題の提出で評価したいと思います。学生の不利にならないように配慮するという申し合わせがありますので、ともかく最後までついてきてくだされば、大丈夫です。

そして、第15回目の課題は、「第11章「環境」、第12章「ビジネス」を通読して、自分が気になる環境倫理の問題、もしくはビジネスエシックスの問題について、調べたり、考えたりして、具体的に論述してください(1000字以上)」というものだった。この応用倫理の具体的な検討を要求するレポート課題に、困難な状況で自らを律し、基礎をふまえ、順序だって学習してきた学生は、よく応えてくれ、各自の問題関心をベースに議論を展開してくれた。

200名の学生に対して、細かな指導ができたかといえども心もとないが、その難点を、学生自らが突破してくれたと思う。

4. Zoomの使用について

前述のように、Zoomのようなアプリケーションを用いて、映像でやりとりをしたことは、3月まで一度もなかった。Skypeのアカウントは持っていたが、使うとしてもメッセージのやりとりに限っていた。それは、その必要が今までなかったからであるし、電話でも抵抗があるのに、自らの顔を晒して通信するなどおぞましいとの思いからであった。とくにZoomにはセキュリティー上の問題があり、国際的な企業や政府機関が使用を避けているという

ニュースもたびたびなされていて、使わなくて済むようなら、済ませたいと思っていた。

しかしながら、有無を言わず、ある大学で学期前の教員間のミーティングがZoomで行われることになってしまい、さらに別の大学ではZoomによるリアルタイムのオンライン授業が通年で必須となってしまった。本当にやむをえず、十数年前に購入して一度も使ったことのなかった玩具のようなマイクだけでZoomに対応していた。

そのような状況下で、5月に、法学部でもZoom授業を積極的に導入したいということだろうか、カメラを購入するのに補助を出していただけとの通知をいただいた。Zoomで使用する機器が、本来、どのようなものかさえ知らず、コロナ禍のなか、何軒も電器店を回ったが、個人、企業ともに需要が大きく、Zoom用の機器の在庫がない状態だった。諦めかけたとき、大須の専門店で、ひとつだけ残っているのを見つけ、性能も調べず、即、購入した。

そうして手にいれた機器で、200人の倫理学1の授業に最初から対応する自信がなかったのも、さしあたり、月曜日2限のドイツ語1の授業に用いることにした。少人数のドイツ語の授業で慣らして、後期、倫理学2の授業には使いたいと思っていた。

ドイツ語1の受講生に5月31日に送ったメッセージは次の通りだ。

こんにちは。月曜日2限のドイツ語1ですが、明日の6月1日(月)にZoomで40分ほど授業(説明と質問の受け答え)をしてみようと思います。Zoomの環境があり、ご都合がつかましたら、以下のデータ(ログイン情報)を参考にして、参加してください。ご都合の悪い方やZoomの環境が整わない方は、従来どおりのやり方を併用していきます。不利になることはありませんので、ご心配なく。Zoomの使い方じたいにつきましては、この機会にネットで調べてみてください。みな

さんのお顔を出したくなければオフにしていだいで結構ですし、音声も、説明のときにはオフにしていだこうと思います。質問は、チャットでもいいですし、音声でも結構です。まったくはじめてですので、お互いに、試行錯誤しながらやってみましょう。よろしく願いいたします。日時 6月1日(月)10:50~11:30(40分以内の予定です)。

90分間、オンラインで学生が集中力を保つのは厳しいと考えた。何より、個人のZoomアカウントを用いる場合40分で切れてしまうということだったので、40分間にわたってZoomで説明や発音練習を行なった。そして、それをもとに、残りの時間で各自課題をやって、そのノートを写真に撮ってWebClassの課題提出機能で送ってもらい、12時20分の授業終了時までには、チェックまで極力終えるという方法をとった。

このZoomとメッセージのやりとりによるハイブリッドな授業は、意外に奏功して、例年になく、学生の基礎を固めることができた。対面式の授業であれば、毎回、黒板に出て問題をやってもらい、チェックと解説をしておき、そこまでノートをチェックすることがない。遠隔だと、逆に、いい加減なことができないのだ。

後期、幸いなことに、名城大学では、11月20日現在、ずっと対面授業を行うことができている。ただ、いつ遠隔に戻ってもおかしくない状況が続いているため、どの授業も、スムーズに遠隔に移行できるように学生とはつねに打ち合わせをしている。先日、ドイツ語2の受講生に、「遠隔になったときに、前期みたいにZoomでリアルタイムでやりたいか」と尋ねたところ、全員一致で「反対」で、オンデマンドで、空いた時間に課題をやるシステムを希望している。時間を拘束されるのが嫌なのだろう。尊重しようと思う。授業は残り5回。すでに教科書の説

明は終えており、コロナ禍にもかかわらず、今年度も、無事に、全員、ドイツ語の基礎が習得できた⁽²⁾。

6. 後期の対面授業について

さて、後期、月曜日1限の倫理学2も、ドイツ語2と同様に、対面授業でスタートすることができた。萱野稔人『リベラリズムの終わり その限界と未来』がテキストで、2年生から4年生までの70名が登録してくれている。昨年度は、(日本学術会議で菅総理によって任命されなかった6名のうちのひとり)宇野重規による『未来をはじめ「人と一緒にいること」の政治学』をテキストとして指定した。倫理学2の受講生は、必ずしも倫理学1を選択しているのではないのだが、倫理学1で学習した倫理学の基礎知識を応用して、より実践的な、現実の社会や法学との関係を具体的に考えてみようという試みだ。

2020年11月初めには、コロナ禍という特殊な状況のもと、実質、トランプ大統領の第一期4年を信認するかどうかを問う、アメリカ大統領選挙が行われた。近い将来、教科書に載るはずである価値観や民主主義の是非さえ問われる活きた教材だ。ひとつおりの情報を提供したあと、どちらが勝つと思うか手を挙げてもらった。アメリカの世論調査の結果では圧倒的に民主党のバイデン候補有利だったが、倫理学2の受講生のなかで、バイデン勝利に手を挙げた学生はひとりだけだった。だが、法廷に持ち込まれる可能性が現時点では残されているものの、これだけの接戦は予想していなかっただけに、見方によっては、よほど学生たちの勘が良かったと言うこともできるだろう。

正直なところ、社会科学系の学部には属している割に、学生の多くは、メディアの情報にも疎いし、社会に対して目が向いていないように感じている。この授業を通して、学生が活きた社会に関心をもってくれれば、受講した意味があると言える。

後期は、どの授業もわたしは対面で行っている。ただ「家に高齢者がいるので全部遠隔で受講したい」とか、「今日は体調が優れないので遠隔で受講したい」という学生もいる。欠席者にはWebClassのメッセージ機能を介して連絡をとり、授業に遅れないように配慮している。コロナ以前は、次の授業に学生が来たときに事情を聴くなどして話をしていたが、こうした細かな配慮は、コロナ後も継続させるべきことだろう⁽³⁾。

とくに法学部には、女子駅伝部の部員をはじめ、各クラブと勉強を両立させようという意欲のある学生が大勢在籍し、倫理学を受講している。9月の初回の授業では「十分な換気をすることによって、教室内での感染対策をするので、寒くなっても厚着をして登校してほしい」と伝えておいた。

10月25日には全日本大学女子駅伝(仙台)で、見事、素晴らしいタイムで4連覇を果たした。4年連続で優勝に貢献したエース・加世田梨花選手は昨年、前後期の受講生であるが、文武両道の典型であり、試合の翌日でも、きちんと課題を提出して、積極的に授業に参加してくれていた。勝利は、実際に走った彼女たちの努力の賜物に他ならないが、このコロナ禍で、アクシデントなく目標が達成できたのは、徳倫理的な観点によれば、チーム全体の、日々の生活の細部にわたる配慮の集大成であり、ひいては、大学全体のそれであろう。

12月30日の富士山女子駅伝が無事開催され、駅伝部が目標の完全優勝を遂げることを、陰ながら、応援している。

7. まとめ 遠隔授業の未来

以上のように、コロナ禍により、思いがけず、遠隔授業を行うという経験をすることができた。前期は、多くの授業を抱え、連日、早朝から深夜までPCの前に座り、資料を作っては提示し、学生とやりとりをすることを繰り返し、自転車操業状態だっ

た。

今まで、何度か遠隔授業や通信教育を受けたことがある。たとえば、2020年の1月から3月にかけて、Eラーニングで教員免許の更新講習を受講し、使う予定はないものの、四半世紀前に取得したままになっていた中学・高校の社会科専修免許、同・国語科第1種免許が有効になった（中学国語の免許取得のさいには教育法や書道など数単位を大学の通信教育を利用して取得している）。講習は、技術的には、パワーポイントを動画で編集したものだ。何年も同じ資料を使いまわしているにもかかわらず、設題そのものや資料に間違いがあったが、こちらが質問するまで、正誤表が開示されるなどの措置はなかった。また、受講生同士で情報を交換できるシステムになっているのだが、実際は機能しておらず、誰とも相談することができなかった。次回、免許を更新することがあれば、せっかくの学びの機会なので、Eラーニングでなく、対面で受講しようと思っている。

わたしが受けたなかで最高のオンライン授業は、Coursera⁽⁴⁾ というサイトで見つけ、2013年の3月に受講したミッチ・グリーン教授による“Know Thyself”（汝自身を知れ）というバージニア大学の講義だ。その内容は、ソクラテスやデカルト、ギルバート・ライルといった哲学のエッセンスのみならず、東洋思想、禅仏教、心理学、精神医学といった多様な分野から自我の問題を扱ったもので、非常に勉強になった。毎回、調べに調べて課題をこなし、最終的に「合格」することができた。大学のサイト上で、大学院生であろう大勢のチューターがシステムを管理し、質問や、技術的な問題に答えていた。また、世界中の優秀な受講生同士の議論も活発だった。Green教授もそこに参加することがあり、ビデオの構成、雰囲気、話し方などを含めて、真剣に取り組んだ受講生の誰もが満足する講義だったはずだ。なお、その講義の記録は“Know Thyself: The

Value and Limits of Self-Knowledge” というタイトルで出版されており、その講義は、Mitch Green、Know Thyselfで検索すれば、いまもYou Tubeで見ることができる。

わたしは、今回、発信する側にはじめてなったわけだが、グリーン教授のレベルの授業をするには、大いに準備が必要であることは分かっていた。今回は、その準備期間がなくて残念であったが、次の可能性に向けて、つねに準備しておきたい。

このように、遠隔授業には、世界中の誰もがアクセスして、高度な知識に触れる可能性が秘められており、すでに実行されている。日本の大学の学費が著しく高いことは、つねに話題になることであり、とくにコロナ後、家庭の経済状況などにより、大学に進学できない学生が増える可能性がある。遠隔授業により、安価に、正式に単位を認定するコースを、各大学が拡張することもあるかもしれない。

学びの可能性が開かれることは、歓迎すべきことだ。ただ、今年度、遠隔授業を、ここで紹介した以外の多様な形態も含めて経験した結果、遠隔授業が成り立つためには、最低限の言語の運用能力と自律心が必要だと感じた。多くの教育機関では、成立しないだろう。名城大学の法学部の大半の学生はうまく対応してくれたものの、緊急事態で、半期だったから、辛抱して付き合ってくれたのかもしれない。

思想家・内田樹は、次のように言う。知識の量に固執し、体が人工物のように固まった反知性主義の人に対立する知性的な人は、「自説に固執することなく、他人の話を黙って聴き、腑に落ちたか、自分の内側をみつめて判断する」。「つまり『腑に落ちたか』否かで『理非の判断をする人』が『知性的』なのだ」。「腑」という漢字の部首が「にくづき」であることから分かるように、「自らの身体反応に感覚を澄まして生きること」が知性的な在り方だと言っているのだ。「本当に知性的な人は、他者との対話を通して、自分の『情報の見方』自体を変える

ことができる。学んできた歴史的事実や書物の内容の理解が、意味が、どんな文脈に置かかてがらっと変わる。そのことを知っている」。

IT機器を使った遠隔授業であれ、書面のやりとりの通信教育であれ、知性的な人であれば生産的な「対話」ができることだろう。ただ、知性的な人になろうとする大多数の若者にとっては、文字通り、身体を相互に対峙して修練するしかないのではないか。

「話頭は転転として奇をきわめというのがいい。『あなたのその話で、私も思いだしたことがある』という。一つの場所にとどまるより、外に転がる、広がる。一周回った頃には最初より理解が深まっている」。対面授業となった後期のはじめに、学生には、この反知性主義に関する新聞記事（内田2020）を読んでもらった。こうした頭でっかちではない、真に知的な空間に教室をしていきたいと思っている。

いま、春にガイダンス資料を読みかえすと、3で引用したように「豚コレラにも、鳥インフルエンザにも、非常に厳しい対応を見せる人々が、新型コロナウイルスに対しては甘く考えていたように思われてなりません」と、新型コロナウイルスの実態が分からず、わたし自身も硬直していたことがよく分かる。どうやらコロナウイルスはゼロにすることはできないようだ。免疫が低下した方々は、十分に用心すべきだが、自然免疫と獲得免疫を發揮して共存していくしかない⁽⁵⁾。反知性主義の典型である「コロナ脳」に陥ることなく、学生とともに知的に困難を乗り越えていきたい。

注

(1) 「真に豊かな人生と社会のために 理工学部における人文科学系授業の実践報告」名城大学教育年報第13号、2020年。なお、そのなかの注(2)に含まれる「BM」は「NBM」(ナラティブ・ベイスド・メディスン)の誤植で

あり、慎んで訂正する。

(2) ドイツ語の授業については、「責任あるドイツ語授業のために」(名城大学教育年報第12号)で詳細を書いた。

(3) 「スポーツは、これを通じて幸福で豊かな生活を営むことが人々の権利であることに鑑み、国民が生涯にわたりあらゆる機会とあらゆる場所において、自主的かつ自律的にその適性及び健康状態に応じて行うことができるようにすることを旨として、推進されなければならない」(スポーツ基本法第2条1項)。「スポーツ」を「学習」に読み替えれば、学びを後押しすることが、教員の使命であろう(金刺廣長弁護士の講演を参照した)。

(4) Courseraは、「世界最高の大学や企業から学位をオンラインで取得してスキルを身につけることができます」と、世界中の大学の遠隔授業が集まったサイトだ(<https://www.coursera.org/>)。有料で単位を正式に取得できるものもある。

(5) 上久保(2020)参照。2013年6月23日に、モンゴル大使館で、ウランバートルに小児がんの専門病棟の建設をすすめるイベントがあり、上久保教授と知り合った。ウイルスに関して不明な点を質問し、丁寧に解答していただいた結果の判断である。

参考文献・資料

植松努「思うは招く」(講演映像)

https://www.tedxtokyo.com/news/talkstowatch_tsutomuematsu/?lang=ja

内田樹「特別編 著者がとく 内田樹さん「日本の反知性主義」×東京大学入試」2020年9月30日付朝日新聞朝刊

宇野重規『未来をはじめ 「人と一緒にいること」の政治学』東京大学出版会、2018年

金刺廣長「被害者ゼロの指導を目指して 指導者が
気をつけるべきハラスメント問題」(講演) 2020年
11月14日、ウィルあいち

上久保靖彦ほか『新型コロナ』WAC、2020年

萱野稔人『リベラリズムの終わり その限界と未
来』幻冬舎新書、2019年

柘植尚則『プレップ倫理学』弘文堂、2010年

Michell S. Green, Know Thyself: The Value and
Limits of Self-Knowledge, Routledge, 2018

資 料

令和2年度名城大学教育年報（教育実践報告）募集要項

1. 教育年報発刊の目的

名城大学における優れた教育実践やその成果を共有・蓄積し、広く教育の質の向上に資することを目的とします。

2. 投稿内容

教育実践報告とします。教育実践報告とは、教育実践を対象とした取り組みで、本大学及び他大学の学部・研究科・センター・部署の参考になるような報告とします。

3. 投稿資格

原則として、本大学の専任職員（教員・事務職員）及び本大学非常勤講師の在籍者とします。なお、本大学を退職した方の投稿については、退職後3年以内を目安とします。退職後に投稿を希望される場合、事前に大学教育開発センターまで投稿資格をご確認ください。

4. 投稿件数

第一著者(first author)としての投稿件数については、単著・共著に関わらず1名につき1件までとします。

5. 投稿原稿の構成と表記

* 執筆担当者

・共同執筆の場合は、1ページ目下部に、各々の執筆分担箇所を明記してください。

* 原稿

- ・A4版の用紙を使用
- ・ページ数：8ページ以内とします。（図表を含めた刷り上がりのものを示す。）
- ・文字や図表の色は白黒であること。

* 文字数

・本文：横書き23字（英文の場合は38字程度）×2段組

* 行数

・36行（2段組）

* 書体

- ・日本語：MS明朝
- ・英 文：Times New Roman

* 文字サイズ

- ①投稿種別：11pt
- ②表題（Title）：18pt
- ③氏名・所属（Name・Faculty）：11pt
- ④章タイトル（Heading）：10.5pt（MSゴシック）
- ⑤本文（Main Text）：9pt

***表記**

・章・節・項に対応した数字体系を付してください。

(例) 1

1-2

1-2-1

・参考・引用文献は、文中の引用箇所の肩に¹⁾、²⁾などと表し、末尾に一括して掲載してください。

6. 投稿原稿の編集

投稿された原稿の形式や表現等については、FD専門委員会が確認・点検します。

7. 発刊形態

名城大学ウェブサイト上で電子媒体として公開します。

8. 原稿料

原稿料のお支払いはございませんが、1原稿につき別刷20部を献呈します。

※20部以上を希望する場合は自己負担にて作成可能です。

9. 原稿の責任と権利

掲載された報告等の内容についての責任は著者が負うものとします。また、その著作権は著者に属します。編集権・出版権は名城大学大学教育開発センターに属します。

著作物は『名城大学教育年報』および名城大学ウェブサイトにおいて公開することとし、関係諸機関からの電子媒体での収集に応じることとします。

10. 提出について

(1) 提出物：提出票1部

印刷された原稿1部

原稿データの入ったCD、USBメモリなど1部

(2) 提出方法：持参または郵送

(3) 提出期限：令和2年11月20日（金）必着

(4) 提出先：名城大学大学教育開発センター（本部棟3階）

なお、様式は<https://www.meijo-u.ac.jp/academics/education/center/publication/annual/outline.html>

より、ダウンロード可能です。

問い合わせ先 〒468-8502 名古屋市天白区塩釜口一丁目501番地

名城大学 大学教育開発センター

(担当：小伊豆・伊藤)

Tel 052-838-2032

E-mail edcenter@ccmails.meijo-u.ac.jp

<1 ページ目様式>

* 文字数

・本文：23字(英文の場合は38字程度)×2段組

* 書体

・日本語：MS明朝

・英文：Times New Roman

* 文字サイズ

①投稿種別：11pt

②表題 (Title)：18pt

③氏名・所属 (Name・Faculty)：11pt

④章タイトル (Heading)：10.5pt (MSゴシック)

⑤本文 (Main Text)：9pt

⑥執筆担当：8pt (共同執筆の場合のみ)

<2 ページ目以降様式>

* 文字数

・23字 (英文の場合は38字程度)

* 行数

・36行 (2段組)

※参考文献は最後にまとめて記入してください。

※共同執筆の場合は氏名の右肩に番号を振り、
1ページ目の下段に執筆担当箇所を明記してください。

※③所属については、
専任の場合、名城大学〇〇学部〇〇学科
非常勤の場合、名城大学非常勤講師
と記載してください。

F D 専 門 委 員 会 委 員

所属等	職 名	氏 名	備 考
大学教育開発センター	センター長	山田 宗男	理工学部教授
学務センター	センター長	山本 雄吾	経済学部教授
法学部	准教授	仁井田 崇	
経営学部	教授	堀川 新吾	
経済学部	教授	伊藤 健司	座長
理工学部	教授	坂東 俊治	
農学部	准教授	荒川 征夫	
薬学部	教授	大津 史子	
都市情報学部	教授	酒井 順哉	
人間学部	教授	一ノ谷 清美	
外国語学部	准教授	ウィキン ポール	
総合学術研究科	助教	神藤 定生	
教職センター	教授	竹内 英人	

あしがき

大学教育開発センター委員会

大学教育開発センター長 山田 宗男

令和2年度『教育年報』、第15号が刊行される運びとなりました。

名城大学大学教育開発センター委員会では、教育の質保証を徹底すべく、様々な教育改善活動に取り組んでおり、教育活動に関する研究や実践事例を共有蓄積し、広く教育の質の向上に資することを目的として、本年報を毎年発刊しています。

本年度の『教育年報』は、「特別寄稿」および「教育実践報告」による構成となっており、例年の教育の質向上に加えて、コロナ禍における教育の工夫やICT活用による教育実践および学習支援に関する寄稿も頂きました。

先ず、特別寄稿では、教育功労賞を受賞された本学外国語学部の津村文彦教授らのグループから海外プログラムの教育実践と教育効果について寄稿頂きました。教育実践報告では、教育実践を対象とした取り組みで、その実践手法が横断的に他学部、さらには他大学の参考になるような事例報告6篇を掲載しております。

特に、今後の「withコロナ」「afterコロナ」時代における教育に関しては、これまでになく手段で多面的に教育の質向上を考えていくことが求められており、本年報がそれを共有できる機会となれば幸いです。

本年報の発刊にあたり、原稿の校正にご協力いただきました先生方、御寄稿頂きました先生方には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

発行：名城大学 大学教育開発センター

編集：名城大学 大学教育開発センター

住所：〒468-8502

名古屋市天白区塩釜口一丁目501番地

電話：(052)838-2033

FAX：(052)833-5230

H P：https://www.meijo-u.ac.jp/academics/education/center/

